

---

# 華と夕凧の魔法

緋月雛菊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

華と夕風の魔法

### 【コード】

N2908T

### 【作者名】

緋月雛菊

### 【あらすじ】

華の国第一皇女のイリスは敵対関係の国の夕風の国の偵察中、夕風の国王位継承者のフェリシアールと出会う。

9月2日に原作を一件増やしました。

…もう一件増えました。

## 設定（前書き）

設定。

## 設定

>ストーリー<

夕凧の国。

王位継承者で予言者の青年フェリシアーノ。  
幾年も変わらない毎日を過ごしていたが、ある日魔術師であり法術士でもある華の国の少女イリスと出会う。

>キャラ設定<

・フェリシアーノ・ヴァルガス

夕凧の国王位継承者の青年。  
幾年も変わらない生活を送っている。  
父親である国王が嫌い。  
予言者でもある。  
光の魔法と回復魔法が得意。  
脱走中にイリスと菊に出会う。

・イリス・プラトリーナ

華の国の第一皇女だが、自由が認められているため街で暮らしている。  
魔術師であり法術士でもあるが剣術も扱える。  
敵国である夕凧の国を監察していた時、フェリシアーノと出会う。  
すべての魔法と回復魔法が使用可能。

・本田菊

イリスの親友で剣の師匠でもある華の国の青年。  
腕の立つ剣士であり陰陽師。

イリスと共に夕凧の国と監察していた時、フェリシアーノと出会う。  
式神を操る。

・アーサー・カークランド

陽炎の国出身の魔術師の青年でイリスの師匠。  
料理の腕はかなりやばいが魔術の腕はかなり凄い。  
すべての魔法を扱えるが回復魔法は扱えない。

・セーシエル

海の国出身の踊り子の少女。

夕凧の国に植民地化される前に祖父と共に華の国に逃げ込んだ。  
イリスと菊とは大の仲良しだが、アーサーは大の苦手。  
特殊武器のチャクラムを扱える法術士。

・ロヴィーノ・ヴァルガス

フェリシアーノの兄だが訳あって華の国に居る。  
レンとは大親友の関係。

自分を捨てた父親に復讐するため、軍に入った魔法剣士。

闇の魔法と氷の魔法が得意。

・初音ミク

歌の国の歌姫である法術士。

夕凧の国に拉致されかけた時にイリスに助けてもらった。  
セーシエルと仲良し。

・巡音ルカ

ミクの姉である錬金術師。

華の国に居る友人の紹介でセーシエルと暮らしている。  
武器錬成が得意だが戦いには不慣れ。

・KAITO

歌の国出身の青年。

ルカの友人でリンとレンの兄。

菊とは親友関係。

イリス、リン、レンに「バカイト」と呼ばれた為、只今引き籠もり  
中。

・鏡音リン

歌の国出身の踊り子。

セーシエルとは大の仲良し。

何時も兄のカイトにちょっかいをかけているが、本人に悪気はない。  
闇の魔法が得意。

・鏡音レン

歌の国出身の魔法剣士。

ロヴィーノとは大の仲良しで何時も遊んでいる。  
夕凧の国に復讐するためロヴィーノと同じ部隊に入った。  
光の魔法と炎の魔法が得意。

・アントーニョ・ヘルナンデス・カリエド

海の国出身の青年。

魔法戦士だが魔法はあまり使えない。

ロヴィーノとレンの入っている部隊隊長。

ロヴィーノとレンをかわいがっているが、二人から頭突きを毎日喰らっている。

銀時とは大親友。

甘いものが好き。

炎の魔法と氷の魔法が得意。

・坂田銀時

霧の国出身の青年。

菊とは仕事仲間。

アントーニョとは大親友で何時も甘いものを食べに行く。  
そのためか、糖分不足になるとイライラしている。

水の魔法が得意。

・ギルベルト・バイルシュミット

雨の国出身の大剣士。

アントーニョとデュオとは悪友関係。

何時も頭の上には小鳥が乗っている。

氷の魔法と風の魔法が得意。

・神楽

雨の国出身の格闘家の少女。

ギルベルトとは喧嘩友達。

酢昆布が大好物。

回復魔法が得意。

・キラ・ヤマト

陽炎の国出身の魔法銃士。

フェリシアーノとは気が合う天然青年。

戦うのを嫌うが、守るために戦う。

風と水の魔法が得意。

・アスラン・ザラ

陽炎の国出身の魔法銃士の青年。

キラの親友でアーサーの弟子。  
全ての魔法を扱える。  
苦勞者。

・ヒイロ・ユイ

雨の国出身の魔法銃士兼魔法劍士。  
菊とは親友。

ギルベルトとデュオ、アントーニヨは少し苦手。  
闇の魔法と風の魔法を扱える。

・デュオ・マックスウェル

雨の国出身の魔法劍士。

ギルベルトとアントーニヨとは悪友関係。  
風の魔法と地の魔法を扱える。

> 国設定 <

・華の国

豊かな大地が広がり花々が咲き乱れる国。そのためか、名前に花の名前の人が多い。  
夕凧の国とは敵対関係。

・夕凧の国

華の国と敵対関係の国で独裁国。  
劣悪な環境で生活している民にきつい仕事をさせている悪国。

・海の国

層気楼の海に浮かぶ楽園国。  
夕凧の国に攻められ、植民地化した。

・歌の国

色々な音が溢れる芸術国。  
海の国と同じ境遇になる。

・雨の国

雨が降り続く山に面する国。  
華の国とは同盟国関係。

・霧の国

霞の山の頂上にある霧に包まれた国で雨の国とは仲良し。  
華の国の同盟国。

・陽炎の国

幻影の高原にある国。  
魔術師や法術士が暮らしている。  
華の国とは姉妹国。

>その他設定<

法術士や魔法剣士などは、耳にピアスかイヤリングをつける。  
魔術師・翡翠

法術士・瑠璃

魔法剣士・琥珀

魔法戦士・瑪瑙

予言者・ガーネット

魔法銃士・真珠

格闘家・ルビー

王位継承者・サファイア

錬金術師・エメラルド

など。

## プロローグ

リイン…リイン…

満月の夜、虫が鳴いている草原に一人の青年が立っていた。

「今日も…変わらなかったよ…」

ぼつりと呟く言葉は何処か儂げだった。

茶色の髪が風に靡くと、彼の左耳には王位継承の証である深い蒼色の宝石「サファイア」のピアス、右耳には予言者の証である紅色の宝石「ガーネット」のピアスが付いていた。

彼はサファイアのピアスを外し、近くの泉に投げ捨てた。

ピアスは何も言わず水底に沈んでいく。

青年はカクンと膝を地面についた。

「こんなの…要らない…」

彼はポロポロと涙を零しながら嘆いた。

そんな彼を連れ戻しに来たように、幾人の兵士が彼の腕を掴むと、何処かに連れ去った。

その様子を見ていた一人の少女は長い碧色の髪を靡かせ、その場をはなれた。

彼女の左耳には魔術師の証である赤色の宝石「瑪瑙」のピアス、右耳には法術士の証である青色の宝石「瑠璃」のピアスがあった。

辺りには静寂が訪れ、虫の鳴き声だけが響いた。

## 設定2（前書き）

追加設定です

## 設定2

### 追加設定

> キャラ追加設定 <

・ シン・アスカ

陽炎の国出身の魔法銃士。

妹がいる。

ロヴィーノとは仲良し。

魔法はアーサーから習っている。

料理の腕はアーサー並にやばい。

全ての魔法を扱える。

・ 刹那・F・セイエイ

海の国出身の魔法剣士兼魔法銃士。

セーシエルとは近所付き合いの中。

魔法は扱えるが主に接近戦を得意とする。

水の魔法と炎の魔法を扱える。

・ ティエリア・アーデ

華の国出身の魔術師。

ローザとは犬猿の中だが基本的には仲良し。

接近戦が苦手。

料理はかなり下手。  
回復魔法と氷の魔法を扱える。

・ローザ・クアドリフォーリオ

華の国出身の魔女。

ティエリアとは犬猿の中。

アーサーの料理が大の苦手。

リン、レンとは近所付き合いの中。

全ての魔法を扱える。

・旭かなめ

陽炎の国出身の魔術師。

アーサーとは師弟関係。

料理の腕は凄い。

キラとフェリシアーノとは仲良し。

全ての魔法を扱える。

出逢いと再会と戦闘（前書き）

目次

## 出逢いと再会と戦闘

夕凧の国、城の城下町である風蓮の街。

其処にある隠れ家に少女イリスは入る。

隠れ家には六人の青年がいた。

「菊、アーサー、キラ、ヒロ、ギルベルト、ロヴィーノ、ただいま」

「おかえり。イリス。どうだった？」

キラの言葉にイリスは少し唖る。

「夕凧の王位継承者は渚の草原に居たわ。泣いていたの。『もう…要らない』って」

「どういう意味なんだ？」

アーサーの言葉にイリスは首を横に振った。

「解らない。でも、王位継承の証のサファイアのピアスは泉に捨てていたから、自由になりたいのね」

「……………」

「ロヴィーノ？」

イリスはロヴィーノがぼんやりとしているのに気が付いた。

「大丈夫か？ロヴィーノ」

ヒロに問いかけられロヴィーノははっとした。

「あ…いや何でもない」

慌てて言うが、彼の本心を見抜いたキラはロヴィーノの頭を撫でる。

「心配だよな。大切な弟だから。毎日『あのクソ親父からフェリシアーノを助け出す』って言ってたもんね」

優しく語りかけるキラにロヴィーノはポロポロと涙を流しながら頷いた。

「大丈夫。私達も居るから」

「イリス…」

ロヴィーノは涙を拭う。

「ああ、彼奴の事は許さない。フェリシアーノを彼奴に悪用させてたまるか！」

「予言の力は悪用されたら能力者が消滅する可能性があるからな。急がないとな…」

「…失敗は許されない」

アーサーとヒロは頷き合う。

と、その時イリスが持っていた「通信石」が光り出した。

淡い緑色の光を放つ魔石を取り出すと、声が聞こえた。

『こちらシン。イリス、聞こえる？』

「シン。こちらイリス。聞こえるわ」

『こつちの手配は済んだよ。そつちはどう？』

「大丈夫よ。アーサーと菊を連れてそつちに向かうわ」

『分かった。じゃあまた後で』

途端、声が途切れ光が消えた。

イリスはスペアの通信石をヒロに渡すと、アーサーと菊を連れて隠れ家を出た。

「せつかくですから、城まで偵察しに行きましょう」

街中を偵察し終え、商店街で菊の提案に二人は頷いた。

「じゃあ、駆けっこだよ！」

「あ！こら、イリス！」

アーサーの言葉を見殺して、イリスは城に行こうとした時。

ドンッ！

「きゃっ！」

「ヴェッ！」

勢い良くイリスは青年とぶつかった。

「「イリス！？」」

慌てて菊とアーサーが駆け寄る。

「ヴェー…」

「あいたたたた…お兄さん、だいじょ…え？」

イリスは青年を見て呆然とした。

彼はロヴィーノと良く似ていた容姿だからだ。

「嘘…ロヴィーノ？」

イリスがロヴィーノの名前を言った途端、青年はイリスの手を握り締めた。

「君、兄ちゃんを知っているの!？」

彼の言葉にイリスは顔色を変えた。

「兄ちゃんって…まさか！」

と、その時。

「おい！居たぞ！」

「っ…!!」

遠くからの兵士の声に青年は青ざめ、震えた。

イリスはポケットから通信石を取り出すと文字を繋げる。

「こちらイリス。ヒイロ、シン、聞こえる？」

『こちらヒイロ。聞こえる』

『こちらシン。ちゃんと聞こえるぜ』

「救出目標と接触…『本当かイリス!』ロヴィーノ、落ち着いて興奮するロヴィーノをイリスはなだめた。

ロヴィーノの声に青年は驚いた。

「に…兄ちゃん？兄ちゃんなの？」

『フェリシアーノ!』

「兄ちゃん！兄ちゃん！」

「…一度通信を切るわ。集合場所は隠れ家よ」

イリスは通信を切った翠色の魔石を菊に投げ渡し、武器であるチャクラムを構えた。

彼女の目の前には兵士が二人が居た。

青年 フェリシアーノを菊とアーサーに預ける。

「……幻影の華」

途端、辺りに沢山の花弁が舞い散り、視界を奪う。

だがそれはアーサー、菊、フェリシアーノ、イリスには見えなかった。

幻覚の花弁だった。

「アーサー、菊、フェリシアーノ、今だよ！走るよ！」

イリスの声と共に四人は一気に走った。

花弁が消えると其処に四人は居なかった。

残っていたのはフェリシアーノが付けていたガーネットのピアスが地面に落ちていただけだった。

隠れ家に辿り着いたイリス、菊、アーサー、フェリシアーノは中に入る。

中にはキラ、ロヴィーノ、ギルベルト、ヒイロの他にシン、デュオ、アスランの三人が居た。

ロヴィーノはフェリシアーノを見た途端、彼に抱き付いた。

「フェリシアーノ！大丈夫か！？」

「うん、大丈夫だよ」

「良かったね、ロヴィーノ」

キラの言葉にロヴィーノは涙をポロポロ零しながら頷いた。フェリシアーノも涙を流していた。

「…こほんっ。えーっとだな、これからど…」「とりあえず、夕風の国から出ましよう。シン、手はずはどう？」「…おい！無視すんな！」「アーサーの言葉を遮り、完全無視したイリスはシンを見る。」

「ああ、まずは誰かが一発派手に敵を引き付けてその間にフェリシアーノを連れて華の国に向かうってやつだよ」

彼の言葉にイリスはクスツと笑った。

「なら派手に引きつける役は私がやるわ。いざとなったら『幻影の華』で脱出する」

「なら俺様もやってやるよ」

「俺もやるぜ！」

「僕もやるよ」

「じゃあ引き付け役はイリス、ギルベルト、デュオ、キラ、俺を含めて五人。ロヴィーノ、ヒイロ、アスラン、菊、アーサーの五人はフェリシアーノを連れて華の国に向かう…これで良い？」

全員頷くと、イリスは立ち上がった。

遠くから数人の足音と鎧の音が聞こえてきた。

「どうやら敵さんが来たみたいだな」

デュオは不敵に笑うとデスサイズを出現させ、構える。

ギルベルトはクレイモア、キラはマスケット、シンはルーンソード、イリスはチャクラム構える。

「ヒイロ、菊、アーサー、ロヴィーノ、アスラン…フェリシアーノを連れて隠れて…この小屋、囲まれたわ」

イリスの言葉に緊張が走る。

全方向から同じ足音と鎧の音が響いた。

「チツ…感づかれたか」

ヒイロはそう言うと、ライフルを構える。

ロヴィーノは二丁拳銃、菊は刀、アーサーは弓矢と本、アスランは短剣を構える。

「に…兄ちゃん？みんな？」

「フェリシアーノ、お前は隠れている…戦わなくて良い」

「…貴方だけは助けなければいけませんから」

ロヴィーノと菊の言葉にフェリシアーノは固まった。

「な…何だよそれ…まるでみんな死に行くみたいな…」

「死ににいくんだよ…下手すればな…」

アーサーは警戒しながら呟いた。

「そんな…そんなのやだよ！何で!？」

イリスはチャクラムを構えたまま、フェリシアーノを見つめる。

「貴方の持つ予言の力はこの世界を左右する力なの。だから悪用されたくないの」

「!?!」

フェリシアーノは絶句した。

自分の持つ予言の力が世界を左右する力だと信じたくなかった。

「…だから、早く隠れ…嫌だ!」…え？」

「やっと…やっと兄ちゃんに会えたんだよ？離れたくないよ!」

「でも…っ！フェリシアーノさん、危ない!」

「え？」

イリスはフェリシアーノを突き飛ばす。

と同時に彼女の左肩に矢が当たった。

「っ!」

「イリスっ!」

慌ててアーサーはイリスに駆け寄り矢を抜き取ると、傷口に白い布を巻いた。

「ぐっ！痛うっ!」

白い布には赤い血が滲み、滲んだ部分は赤黒く染まっていった。

「回復魔法を!」

「っ駄目！時間がないわ！早くみんなはフェリシアーノさん連れ  
て逃げて!」

「イリス!あなたは華の国の皇女なんだ!置いていける訳…」

「良いから早く!幻影の華でなら時間稼ぎ出来るから!」

イリスは呪文を唱えるが幻影の華は上手く発動しなかった。

痛みのでいで精神集中が途切れたからだ。

と、その時に幾人の兵士が入ってきた。

キラとアスラン、ロヴィーノ、ヒイロは銃撃戦で戦った。

だが戦っても兵士は湧いてきた。

「チイツ！しつこいんだよ！」

デュオはデスサイズを振るう。

大鎌の刃は兵士の首や胴体を斬り裂くと同時に辺りに鮮血を撒き散らした。

ギルベルトとシンはデュオに応戦するがなかなか数が減らない兵士に苛立ちを感じていた。

「なかなか減らねえな、おいっ！」

「ギルベルト！油断するなよ！」

「分かつてる！」

すると外で断末魔の悲鳴が聞こえてきたと同時に隠れ家の壁が破壊された。

其処にいたのはアントーニヨ、レン、刹那、セーシエルの四人だった。

「アントーニヨ！？それに刹那、レン、セーシエル！？」

ロヴィーノとアスランは驚いた。

「イリス！大丈夫！？」

セーシエルは武器であるチャクラムを放り投げイリスに近寄る。

「だ…大丈夫だよ…くうっ…」

「じっとしてて。癒やしの泉よ…」

彼女が唱えるとイリスの傷はたちまち癒えた。

癒えた腕を軽く動かすとイリスは立ち上がった。

「ありがとう、セーシエル」

イリスがお礼を言うとセーシエルはにこにここと笑った。

「セーシエル、戦える？」

「うい！大丈夫だよ！」

二人は頷き合つとチャクラムを構える。

レンはダガー、刹那はロングブレードとダガー、アントーニヨは戦斧を構える。

と、フェリシアーノは杖を握り締めた。

杖はイリスが隠れ家に予備として備え付けた武具だった。

「俺だって、魔法使えるよ！俺も戦う！」

イリスは反対しようとしたが、フェリシアーノの意思が固い事を知り諦めて頷いた。

途端、フェリシアーノの顔はぱあっと明るくなった。

「ありがとう！えーっと……」

「イリス、でいいよ」

「うん！ありがとう、イリス！」

クスツとイリスは笑うと敵に向かい合うとチャクラムを投げた。チャクラムは回転しながら殺傷力を高め、兵士に斬りかかった。

フェリシアーノは呪文を唱える。

「……………閃光」

彼が唱え終えるのと同時に一線の光が兵士を貫いた。

貫かれた兵士は蒸発するかのようになくなっていった。

「どけえええっ！」

レンはダガーを投げ、兵士を攻撃する。

刃は的確に急所を突いた。

アントーニヨと刹那はギルベルトとシンの援護をした。

「煌めく星は流れて消え去る運命！さあ、舞い上がれ！時風の華！

その生命の輝きを見せ付けろ！瞑翔の風蓮！」

イリスが唱え終わると辺り一面に漆黒の花が咲き乱れた。

その花は兵士たちの動きを止める力を持っていた。

「アーサー！今だよ！」

「分かっている！ブラッドアウト！」

イリスに急かされたアーサーは闇の魔法を発動させた。

漆黒の花は赤黒く染まり、兵士を包むかのように呑み込んでいく。兵士が呑み込まれた場所には黒い柱だけが残った。

と、その時。

グシャッ！

潰れる音と共に柱の上からは鮮血が溢れんばかりに滴り落ちた。黒い柱が消えると其処には何もなく、床には血の海が広がっていた。静寂が訪れるとイリス達は武器を仕舞い、隠れ家を出た。

そして華の国に向かうため夕凧の国を出ようとした。

だが出ようとした時、イリス達の前に一人の少年が立ちふさがった。彼を見たフェリシアアーノは微かに震え、ロヴィーノの背後に隠れた。

「フェリシアアーノ様、お迎えにあがりました」

彼の言葉にロヴィーノは警戒を露わにした。

「…夕凧の国最強の魔法剣士のシアトル、クロア・メイティック…」  
イリスはチャクラムを構えるとシアトルを睨み付ける。

「災厄の皇女イリス・プラトリーナと災厄の皇子ロヴィーノ・ヴァルガスか…」

「兄ちゃんとイリスをそんな風に言うな！」

フェリシアアーノはぎっとシアトルを睨み付ける。

「兄ちゃんとイリスは災厄なんて持ってない！それに俺は帰らない。もう王位継承者じゃない！」

「……ならば、力づくでも連れ戻します」

シアトルはパチンと指を鳴らした途端、彼と契約をしている精霊が現れた。

「フェリシアアーノを道具としか思っていない君達に、彼は渡さないよ」  
キラはマスケットを構えるとそう言った。

アーサーとフェリシアアーノも武器を構え、何時でも詠唱出来るように精神を集中させた。

「シアトルは夕凧の国最強の剣士…油断しないで」  
イリスの言葉に全員は頷いた。

と、その時だ。

「メール・ティアドロップ！」

少女の声と同時に水の魔法がシアトルを攻撃した。

「この声は…」

「くっ！旗色が悪過ぎる！一時撤退するが…イリス・プラトリーナ、ロヴィーノ・ヴァルガス…いずれフェリシアーノ様は返してもらいます」

「返すなんてしねえよ（ないわ）！！」

イリスとロヴィーノはハモリながら叫んだ。

「僕は貴方たちのやっている行いを許さない…いずれその腐った性根を叩き直す！」

闇の中から少年の声が聞こえ、現れたのは深紅の薔薇のような髪色の少女と太陽の光のような髪色の少年だった。

「ローザ、かなめ！」

イリスの言葉にシアトルは顔を歪めた。

「『精霊華の魔術師』ローザ・クアドリフォーリオ、『草月の魔術師』旭かなめ…どう考えたって私の負けは見えたも同然…」

「シアトル…どうして」

ローザの言葉にシアトルはマントを翻しその場から消え去った。

「シアトル！！」

「かなめ…もう良いよ…追わなくていい」

消え去ったシアトルを追いかけようとしたかなめをイリスは止めた。イリス達は華の国に向かい歩んだ。

そんな彼女たちを満月が慈しむように照らしていた。

## もう一人の予言者

華の国、城下町である風蘭の町。

其処にある小さな一軒家にイリス達は居た。

家の中には最小限の家具が置かれていた。

「イリスの家つて何時見ても最小限の家具しか置いてないね」

リンの言葉にイリスは溜め息混じりに語った。

「城に居たとき、家具がごしゃごしゃ置かれていたの。それスツゴク邪魔だつたんだよね」

「あ、それ分かる」

ミクとイリスは家具の最小限について熱弁し始めた。

それを見ていたティエリアは小さく溜め息を吐いた。

「まったく…イリスは皇女としての自覚は…「無いよ」……………」

即答のイリスに呆れかえったティエリアは深く溜め息を吐いた。

彼の肩をアスランは軽く叩いた。

「ティエリア、諦めなよ。イリスが頑固なのは知っているだろ？」

「それはそうだが…」

「そうだ〜諦めろ〜」

イリスが言った途端に傍にいたアントーニヨが黒い笑みを浮かべた。

「イ〜リス〜？何言うてんねん。あかんなあ〜。ちよつと其処に座りや。きつーいお灸を据えたるさかい」

「うわあああつ！ごめんなさいー！トーニヨ怒らないでええつ！」

慌ててイリスは逃げたが見事に捕まり、ティエリアとアントーニヨ、アスランから説教を喰らった。

それを見ていたフェリシアーノとロヴィーノ、キラ、菊は笑っていた。

イリスは床に正座をして半泣き状態で説教を喰らっていた。

「ははっ！イリスだつせえ〜！」

「うゝー！ロヴィーノ、後で覚えていろよ！」

「イリス！話を聞け！」

アスランに叱られたイリスはしゅんとなりながらもロヴィーノを恨めしそうに睨み付けた。

「あはは！…はあ俺、こんなに笑ったの久し振りだよ」

目尻に涙を浮かべながらフェリシアーノは言った。

「毎日毎日叱られてばかりで…一人ぼっちで…笑う事さえ出来なかつたから…」

辺りに沈黙が訪れた。

と、イリスは立ち上がると小さく泣いているフェリシアーノを優しく抱きしめた。

「イリス？」

「大丈夫。此処には私やロヴィーノ、菊、キラ、アスラン…みんなが居るからね。一人じゃない…寂しくないよ」

フェリシアーノは小さく頷くと明るく笑った。

それを見たイリスはフェリシアーノの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「よし！これで大丈夫…んなワケあらへんで、イリス。説教の途中やで…ですよねえ…トーニヨさん」

イリスは暗く笑うと再び正座をし、説教を喰らった。

するとロヴィーノは再びイリスをからかった。

「ロヴィーノのばか」

イリスは誰にも聞こえない程小さく呟くとロヴィーノを睨み付けた。

説教が終わる頃は既に日が暮れていた。

リン、レン、ミクは自宅に戻り、キラ、アスラン、ティエリア、菊、

アーサー、アントーニヨは警備の仕事があるため王城に向かった。イリスは夕食の支度を始めるために台所に向かった。

「イリス、今日の夕飯はなんだ？」

ロヴィーノの問いかけにイリスはエプロンを着けながら答える。

「ラタトウイユパイ、ロールキャベツ、ジェノベーゼ、野菜サラダとブッタネスカ。あとデザートとしてフルーツグラタンとトロピカルピザ」

「随分豪華だな」

「私から兄弟再会のお祝い。それに折角貰った野菜や果物、パスタ、お肉、穀物を早く使わないと勿体無いでしょ？」

「まあ、イリスの料理は結構美味いから良いけどさ…あの二人のは…」

「アーサーとローザね…あれは勘弁してほしいわね」

イリスは苦虫を噛み潰したような表情になった。

「あの時は死ぬかと思った…」

「…そうね…」

イリスとロヴィーノは苦笑いを浮かべる。

「ま、今日は私一人で作るわ。ロヴィーノとフェリシアーノは休んでて」

「いや、俺も手伝う。一応世話になっているからな。一応」

「一応って何！？どーいう意味よ！しかも二回言った！」

「一応は一応だ、このやろー」

ロヴィーノはイリスを無視して壁にかけてあるエプロンを取ると着けた。

「あ！俺も俺もー！」

フェリシアーノもエプロンを着けるとイリスとロヴィーノの居る台所に入った。

夕食を作り終え、食卓に料理を乗せると三人は話ながら夕食を食べた。

賑やかだった夕食の後、後片付けをするイリスは顔を上げてリビン

グを見る。

其処にははしゃぎすぎて疲れ果ててソファで眠っている兄弟が居た。イリスは小さく笑うと近寄り毛布を二人にかけた。

するとドアをノックする音がした。

警戒しながらイリスはドアを開けると、其処にはアントーニヨとイリスの妹のスイレンが居た。

「アントーニヨ、スイレン、どうしたの？」

「お母様からのお使いですわ。お姉様これを」

スイレンは持っていたバスケットから小さな紙袋を二つ取り出すとイリスに渡した。

受け取ったのを確認したスイレンはアントーニヨと共に城に戻った。イリスはドアに鍵をかけるとリビングに戻り、紙袋を開けた。

その中にはピアスが二つずつ入っていた。

桜色の紙袋には翡翠と瑠璃のピアス一つとガーネットと琥珀のピアス一つ。

萌葱色の紙袋には翡翠と琥珀のピアス一つと瑠璃と真珠のピアス一つ。

二組のピアスを見たイリスは悲しくなった。

「……これも、予言通りなのよね……」

イリスが俯くとチリンと音と共に彼女の耳に着けてあるピアスが揺れた。

そして瑠璃のピアスの金具部分には小さなガーネットが煌めいていた。

## エレメント・マテリア

翌日、イリスの自宅には菊とアーサー、アントーニョ、ギルベルト、セーシエルが来た。

その後、刹那、ティエリア、キラ、アスラン、シン、ヒロ、デュオが来た。

イリスは紅茶を人数分淹れると、テーブルに置いた。すると菊が一つの袋をフェリシアーノに渡した。

「菊。これは？」

「開けてみてください」

フェリシアーノが袋を開と中には杖があった。

杖の本体は白い木で作られ、先端には小さいが宝石をあしらった細かい金細工の飾りがあった。

「コレって、アスランが作ったやつでしょ？」

「よく分かりましたね」

菊の言葉にイリスは語る。

「私のチャクラムだってアスランに作ってもらった武器だもん。分かるよ」

その言葉に菊は頷いた。

キラはフェリシアーノの隣に座った。

「フェリシアーノ。アスランは華の国でも右に出る者は居ない武器の作り手なんだよ」

「そうなの？」

フェリシアーノの問いにキラは頷いた。

「あ、武器作ってくれてありがとう。アスラン」

「いいよ、そんなお礼なんて。俺は好きで武器を作っているんだ。凄いのはルカだよ」

「ルカ？」

フェリシアーノは首を傾げる。

「ああ、巡音ルカか。彼奴、錬金術が凄いよな」

デュオの言葉にフェリシアーノはハテナマークを一杯にしていた。

「明日、ルカの家に行こうか。そろそろ私のチャクラムとロヴィーノの銃と剣のメンテに行かないとね」

イリスはそう言うとチャクラムを取り出す。

チャクラムには細かな傷が所々に付いており、刃は欠け、小さなサファイアとアメジストには亀裂が入っていた。

それを見たアスランは眉間に皺をよせた。

「ボロボロだな。これはルカに直してもらわないと駄目だ。魔力も欠けているぞ」

「あ、やっぱり？どれくらいかかるかな？」

「それはルカに聞け。だがサファイアとアメジストは新しく変えなといけないな」

それを聞いたイリスは深々と溜め息を吐いた。

アスランはロヴィーノの銃と剣を見る。

銃は引き金部分が壊れ欠け、今にも取れそうだったのと序でに小さな黒真珠も欠けていた。

剣も刃が欠け、アクアマリンが罅割れていた。

「ロヴィーノ。このままじゃ銃は弾詰まりを起こすぞ。宝石も変えないとな」

「はあ…しゃーない。『水月の坑道』に向かいますか。ロヴィーノ行くよ」

椅子から立ち上がったイリスはドアに手をかける。

「なら俺も行く」

「ヒイロ」

「俺のライフルのルビーも割れているからな。ついでだ」

「分かった。じゃあ私とロヴィーノ、ヒイロで水月の坑道に…俺も行く！…やっぱり、フェリシアーノも行くか…じゃあ、この四人ね」

イリスはそう言うと、ドアの近くに立てかけてある長剣を二つ手に

取ると、鞘から刀身を抜き出した。

白銀に輝く刀身はイリスの顔をはっきりと映し出した。

長剣の一つをロヴィーノに投げ渡すとイリスは鞘の帯を腰に巻いた。

「じゃあ、行くよ」

イリスがそう言うのとヒイロ、フェリシアーノ、ロヴィーノの三人はイリスの後を追って水月の坑道に向かった。

風蘭の街から数十分位で着く場所に水月の坑道はあった。

中に入ると陸地の筈なのに海風の匂いがした。

「ヴェー…渚の草原と同じ匂いがする」

「同じ匂いだよ。水月の坑道にある水源と渚の草原にある泉とは繋がっているんだ。じゃあ、奥に行こうか」

イリス達は奥に向かった。

途中、スライム程度の魔物が現れたが、弱かったので簡単に倒せた。暫くすると潮の匂いが強くなった事が分かる。

「今はあるかな？エレメント・マテリア」

「彼奴に喰われてなければな」

「ヒイロ冷たい……」

「兄ちゃん、兄ちゃん」

「何だ？」

「エレメント・マテリアって何？」

「ジエム宝石の原石だよ。水月の坑道でしか取れないんだ」

「へえ〜」

フェリシアーノが納得すると同時に坑道の最深部に着いた。と、其処には巨大な魔物が巣くっていた。

「キマイラかあ……面倒だなあ」

「仕方ないだろ。行くぞ！」

ヒイロのかけ声と同時にイリス、フェリシアーノ、ロヴィーノはキマイラに飛びかかった。

ロヴィーノは長剣を鞘から抜くと手慣れた手付きで脚部に斬りかかった。

ヒイロはライフルがオーバーヒートしないように警戒しながら銃撃戦をした。

フェリシアーノは魔術を発動させて戦った。

イリスはロヴィーノの援護をした。

キマイラの爪がロヴィーノを襲うが間一髪でイリスがシールドの術を放った。

数時間後、キマイラを倒した四人はエレメント・マテリアを探した。エレメント・マテリアが見つかるると全員は風蘭の街に戻った。

花茶と鉱石（前書き）

イリスは第二のロシアさん設定（笑）

## 花茶と鉱石

風蘭の街に戻ってきたイリス、ヒイロ、フェリシアーノ、ロヴィーノはミクの家を訪ねた。

ミクはイリス達を中に入れると、紅茶を淹れた。

すると奥からピンク色の長い髪を持つ女性が来た。

「あら、イリス。おはよう」

「おはよう、ルカ。あのさ、私とロヴィーノ、ヒイロの武器がやばいからメンテナンスお願いできる？ エレメント・マテリアは見つけてきたから」

イリスはそう言うとエレメント・マテリアと武器のチャクラム、銃剣、ライフルをテーブルに置いた。

ルカはチャクラムを診ると小さく溜め息を吐いた。

「…この修理はミスリルとオリハルコンが必要ね。大分痛んでるわ」

「ミスリルとオリハルコンか…エレメント・マテリアには無い鉱石だね…とりあえず調達して来るわ。ミスリルとオリハルコンは『時守りの泉洞』だったよね」

「鉱石を守っているゴーレムには勝たないと駄目よ」

ルカの言葉にイリスは苦虫を噛み潰した表情になった。

「ゴーレム…あの堅物魔物ね…」

「あの時、苦戦したもんな。もう行きたくねえよ、ちくしょー」

ロヴィーノの言葉にイリスは苦笑いを浮かべた。

「何時夕風の国が攻めてくるか解らないから、あまり遠出はしたくないし…うーん…お城にミスリルとオリハルコンあるかなあ」

イリスは小さく呟くと紅茶を飲み干した。

小さな可愛らしい花卉が浮かんでいる淡い紅色のお茶は、果実のような甘い香りが漂っていた。

フェリシアーノは初めて飲んだ紅茶に笑みを零した。

「フェリ、気に入った？」

イリスの問いかけにフェリシアーノは頷いた。

「うん！これ、何のお茶なの？」

「『フィラの花茶』。林檎のような甘い香りがする『フィラの花』を乾燥させて作る紅茶で、華の国にある銘茶の一つなんだ」

「一つって事は他にもあるの？」

「ええ。檸檬の香りの『ルノアールの花茶』、柘榴の香りの『アルチエアの花茶』、葡萄の香りの『メイルの花茶』、無花果の香りの『フェリエの花茶』とか色々あるわ。淹れ方は結構難しいから、華の国の人々しか淹れられないの。ミク達は別だけどね」

「へえ。そうなんだあ」

キラキラと子供のように瞳を輝かせているフェリシアーノを見て、イリスは思い付いた。

「花茶は城で作っているの。行ってみる？」

「え？大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫。フェリはもう夕凧の王位継承者じゃないんだから」

「でも良いのか？」

ロヴィーノの問いにイリスは「大丈夫」と言っただけで笑った。

「ロヴィの時も同じだったじゃん。大丈夫だよ。私は一応皇女だし、イリスはそう言うのと立ち上がった。」

「ヒイロはどうする？」

「武器の調整をするから残る」

「そう…じゃあ、行くよフェリ、ロヴィ」

「あ！イリス待って！兄ちゃん、早く早く！」

「分かった！分かったから引くな！」

フェリシアーノはロヴィーノの手を引きながらドアに向かったイリスを追った。

華の城に着いた三人は、自由に行き来している街人たちの中にいた。

白を基準とした城壁には、鮮やかな蔦が青々と葉を茂らせながら這い蹲っていた。

壁に刻まれた紋章は白い翼に包まれた蒼い薔薇の紋章だった。

「あの紋章は母さんの紋章。私のは雛菊とアイリスの紋章なんだ」  
アイリスの説明にフェリシアーノは頷いていたが、理解が出来ていなかったのは一目で分かった。

三人は城の中庭に入った。  
と、その時。

「アイリス姉様ああっ！」

「え？あ…どわあっ！」

いきなり飛びかかってきた少女を、アイリスは驚きながらもすれすれで交わした。

少女はそのまま地面に激突した。

「あー…プラム。悪い…許せ」

アイリスが立ち去ろうとしたその時、少女は彼女の足にしがみついた。

「ぎゃあああっ！離せええええっ！」

「姉様…ウッフ…捕まえましたわあ…」

「キモイ！失せろ！」

とっさにアイリスは魔術を放った。

まともに魔術を喰らった少女はバタリと倒れた。

イリスはツンツンと棒切れで突つつき、少女が動かない事を確認する。

「イリス…大丈夫か？」

「大丈夫…なワケねえだろおおおおっ！」

ロヴィーノにツツコミを返したイリスは泣きながら叫んだ。

## 決意

### 花蓮の庭園。

様々な花が咲き乱れている庭からは、甘い芳醇な香りが漂っていた。イリスは、淡いピンク色の可愛らしい花をフェリシアーノに見せる。「これがフィラの花。これを干して作ったのがフィラの花茶だよ」

「綺麗だねー」

「フィラの花はメンタルケアによく使われるんだよ」

イリスが説明していると、一人の青年が来た。

「イリス、其奴が夕風の‘元’、王位継承者か」

「グラス兄さん！フェリは王位継承者じゃない！」

「ちゃんと‘元’って付けて言っただぞ！バカ妹！」

「バカとはなによ！バカとは！このあほんだらバカ兄さん！」

「んだと！？」

喧嘩をはじめた二人を見ている双子は、巻き込まれないように少し離れた。

と、その時。

「グラス！イリス！何しているの！？」

「カシス姉さん！？」

「喧嘩しないの！迷惑でしょ！！」

一人の女性 カシスが腕を組みながらグラスとイリスを叱りつけた。

「カシス・アルメリア。苗字はイリスと違うが、れっきとした姉妹

でイリスの姉ちゃんだ。本当はカシスが第一皇女だけど、訳あって

イリスが第一皇女なんだ」

ロヴィーノの言葉にフェリシアーノは頷いた。

カシスの説教を喰らっている兄妹はしぼんでいた。

暫くして説教は終わった。

イリスはロヴィーノとフェリシアーノを連れて母親である華の国女王に会いに行った。

女王、フローラは三人を見て小さく微笑んだ。

「来ましたね、イリス。そして夕風の双子の皇子よ。今回はなにようで来たのですか？」

「母さん、ミスリルとオリハルコンはありますか？武具の修理に必要なんです」

「ミスリルとオリハルコン…ありますよ。ですが、イリス。貴女は皇女なのですよ？フェリシアーノさまと同じ予言の神子である貴女が戦い続ける事はないのですよ？」

フローラの言葉にロヴィーノとフェリシアーノは驚いた。

イリスにも予言の力があることを初めて知ったからだ。

「母さん、私はその力を弄ぶ夕風の国を許せないので。フェリを道具として閉じ込め、ロヴィを災いの皇子として捨て去った夕風の国が！」

イリスは激昂しながら叫んだ。

強く掌を握り締めたせいか、赤い血が滴り落ちていく。

「私は皇女だけど、みんなを守るために戦い続ける！それが私の覚悟なんだ！」

その言葉にフローラは驚いたがすぐに顔を引き締めた。

「…分かったわ。貴女の決意もね…」

フローラはそう言うのと白銀の鉱石と黄金の鉱石を出現させ、イリスに渡した。

「ミスリルとオリハルコンよ。イリス、その力、守るために使いなさい」

「はい」

イリスは頷くと、フェリシアーノとロヴィーノと共に城を後にした。

「…祈りの華を咲かせたのね…イリスアリア」

フローラは呟くと、自室に戻った。

ルカの家に戻った三人はルカに二つの鉱石を渡した。  
そしてルカは、イリスの武器を直すために作業に取りかかった。  
自宅に帰った三人は夕食を済ませて、眠りについた。

## 原石のルビー

明くる日、目を覚ましたイリスは朝食を作るために台所に向かった。

「さ　　さ　　」  
歌を口ずさみながら卵を割っていると、其処にフェリシアーノが来た。

「イリス、おはよう」

「おはよう、フェリ。ロヴィイは？」

「兄ちゃんならまだ寝てる。今日のご飯は？」

「今日は軽めに、トースト、野菜サラダ、オムレツ。後、デザートとしてクッキー。飲み物は紅茶か珈琲だよ」

「じゃあ俺も手伝うよ」

フェリシアーノは壁に掛けてあるエプロンを器用に身に着けると、イリスのいる台所に立った。

「助かるよ。じゃあ、野菜サラダを担当して。材料はトマトとレタス、胡瓜、玉葱。玉葱はもう切つてあるから、トマト、レタス、胡瓜をお願い」

「わかったあ」

早速フェリシアーノは野菜を切るのにかかった。

イリスはボウルに卵を割り入れるのを再開した。

卵を割り入れると、味付けしながらよくかき混ぜ、温めたフライパンにバターを入れて溶かした。

バターを溶かしたときの、芳醇な香りが辺りに漂う。  
香りに気付いたのか、ロヴィーノが来た。

「んー…おはよう…」

「おはよう、ロヴィイ」

「今日はオムレツか…」

イリスは頷くと、フライパンに溶いた卵を流し入れる。  
香ばしい匂いと音が辺りに漂った。

イリスは三人分のオムレツを作り終えると、その時ドアをノックする音がした。

「おい。イリス、フェリシアーノ、ロヴィーノ、いるかー？」

「シン？いるよー。入って」

ドアがひらくと、其処には髪をボサボサにしたシンがいた。

「あんだ…また朝食食い忘れたな？」

「あはは…はい」

「全く…仕方ないなあ」

イリスは苦笑いを浮かべながら、もう一人分のオムレツを作り始めた。

「シン、なんで朝ご飯食べ忘れたの？」

「俺が居るところは寮だからな。寝坊したら朝飯は抜きで、昼飯まで我慢しないと駄目なんだ。その点ではロヴィーノが羨ましいよ。」

イリスの飯はアーサーとローザより美味しいから」

「私をアーサーとローザと比べるな」

イリスはそう言うと、作り終えたオムレツをテーブルに乗せた。

「さんきゅー！」

「ったく」

イリスは素直に喜ぶシンを見て呆れていたが、微かに笑っていた。

「んー やっぱイリスの飯は美味いや」

「三人共、紅茶と珈琲、どっちにする？」

イリスはティーポットとコーヒーマルを持ちながら、シン、フェリシアーノ、ロヴィーノに尋ねる。

「俺は珈琲」

シンはサラダを頼張りながら言う。

「俺は紅茶がいいな」

フェリシアーノは、パンを千切りながら言う。

「シンと同じで珈琲」

ロヴィーノはサラダのトマトをかじりながらそう言った。

「珈琲二杯に紅茶二杯ね。フェリ、紅茶は花茶にする？」

「うん！」

「わかったわ」

イリスは微笑むと、珈琲と花茶、紅茶を淹れた。甘い香りと芳ばしい香りが辺りを包む。

賑やかな朝食を終え、シンとロヴィーノは城に向かった。

イリスとフェリシアーノは、街の広場に散歩に出かけた。

「あ！イリス姉ちゃんだ！」

「イリス姉ちゃん！」

イリスの姿に気づいた幼い少女達が来た。

「アルメリア、リナリア、おはよう」

「姉ちゃんおはよう！」

「姉ちゃん、そっちの男の子は誰？」

大きなピンク色の瞳を開いて、アルメリアはフェリシアーノを見つめた。

「フェリシアーノ。ロヴィーノの弟なんだ」

イリスが説明すると、アルメリアとリナリアは、ぱあと笑った。

「ロヴィー兄ちゃんの弟なんだあ！」

「ホントだ！ロヴィー兄ちゃんに似てる！」

明るい少女たちは小さな手で、フェリシアーノの手を握る。

「フェリシアーノだから、フェリ兄ちゃんだね！あたしはアルメリア！」

「私はリナリアだよ！よろしくね、フェリ兄ちゃん！」

きやつきやつ、とはしゃぐ少女たちに囲まれたフェリシアーノは少し戸惑った。

「俺が怖くないの？俺は夕風の王子だったんだよ？」

すると、アルメリアはぶうつと頬を膨らませる。

「なに言ってるの？フェリ兄ちゃんはフェリ兄ちゃんだよ！」

「ロヴィー兄ちゃんも夕風の王子だけど、今は私の家族だもん！フェリ兄ちゃんも私の家族だよ！」

その言葉にフェリシアーノはポカンとした。

「華の国はね、国民全員が家族なんだ。難民や移民でも家族として迎える。それが華の国と云う国なんだ」

「イリス…」

「フェリはもう、私達の家族なんだ。夕凧の王子でも、予言者でもない。フェリシアーノ・ヴァルガスと言う、ロヴィーノの弟。私達の大切な家族の一員だ」

優しくイリスが語った途端、フェリシアーノは堪えきれず、涙を零した。

「えっ！フェリ！？」

「フェリ兄ちゃん？どうしたの？」

イリスとアルメリアは少し慌てた。

「…俺、凄く嬉しいんだ」

「フェリ兄ちゃん、泣かないで！」

「そっこだ！」

何かひらめいたアルメリアはスカートのポケットから、彼女の手のひらからはみ出るくらいの綺麗な赤色の石を取り出し、フェリシアーノに突き出した。

「これ、フェリ兄ちゃんにあげる！」

「アルメリア！これ、あんたが大切にしているルビーじゃ…！」

イリスの言葉に、アルメリアは大きく首を振った。

「いいの！フェリ兄ちゃんにあげるの！」

アルメリアはフェリシアーノの手にルビーを握らせた。

「もう泣かないって約束！」

「うん…。約束する。ありが…とう…」

嬉しそうに笑うアルメリアは、リナリアと共に2人の側を離れた。

「イリス」

フェリシアーノはイリスに向き合う。

その表情は真剣だった。

「俺、あの笑顔を守りたい。だから…」

「わかったわ。フェリが決めたのなら、私はそのサポートをする」

「ありがとう」

イリスは小さく笑うと、くるりと向きを細工師の工房が集まる地区に体を向けた。

「じゃあ、ルカの家に行こう。そろそろチャクラムが直ってると思うから」

「うん！」

二人は、ルカの家に向かうため、歩き出した。

蒼い華（前書き）

ひまじむらの更新です？

## 蒼い華

イリスとフェリシアーノはルカの家に向かうため、細工師や工房が軒を並べる路地を歩いていった。

ふと、イリスはとある工房の近くにある酒場の前で歩みを止めた。

「イリス？」

「しっ」

耳を澄ませたイリスは何かを感じ取り、フェリシアーノが着ている服の袖を掴むと、近くの工房の影に隠れる。

酒場からは見覚えのある紋章の刺青をいれた二の腕をさらしている男が二人出てきた。

途端、フェリシアーノはびくりと体を震わせる。

「夕凧…だな」

イリスはじつと息を潜めながら、相手の様子を窺う。

男達はイリス達に気付いてはいないらしく、そのまま市街地方面に向かった。

「…フェリ、急ごう」

「うん」

二人は頷き合い物陰から出ると、ルカの家の方角へと走り出した。

ルカの家についたイリスとフェリシアーノは中に入る。

「あら、イリスとフェリシアーノ、おはよう。イリス、武器の修理なら終わったわよ」

「ありがとう」

イリスがチャクラムを受け取る瞳に険しい光が宿っているのを、ル

力は見逃さなかった。

「何かあったのね」

「ルカ、右腕に刺青を入れた男達は来てないよね？」

イリスの言葉にルカは小さく頷く。

「ええ、来てないわ。刺青って、どんな刺青かしら？」

「夕風の紋章をした刺青。多分、フェリを連れ戻しに来たんだと思う」

夕風の単語に反応したルカは表情を険しくする。

「華の国に夕風の兵士は入れない筈よ」

「ううん…、例外が一人だけいる」

「シアトル…ね」

その言葉にフェリシアーノは頷く。

「確かにシアトルは簡易結界なんて簡単に壊せる程の魔力を持つからね」

「かなめ」

奥の工房に続く扉の前にはかなめが立っていた。

「何時の間に居たの」

「僕もルカに武具の修理を頼んでいたからね」

「そう」

かなめは表情を険しくしながらフェリシアーノを見据える。

「フェリシアーノ、お前はシアトルが何処出身が判るか？」

「え？ううん、知らない」

「…此処だよ。彼奴の本名はシアトル・ベイリーフ。彼奴はこの国を裏切ったんだ」

その言葉にフェリシアーノは驚きを隠せなかった。

「シアトルは以前、夕風の国への戦線に行ったんだけどそれ以来行方知れずになり、そして夕風に属する魔法剣士になったんだ」

かなめは怒りを抑えながら語る。

親友に裏切られたショックがよほど大きかったらしく、その瞳には憎しみが入り交じっていた。

「かなめ、落ち着いて。確かにシアトルは夕凧側の魔法剣士になった。けど何が理由が在るはずよ」

イリスがかなめを落ち着かせようとするが、彼は溢れ出る感情を抑えきれなくなった。

「僕の姉さんはシアトルに殺されたんだ！だから僕は……！」

「清廉の眠り……！」

イリスが呪文を唱えると催眠作用のある蒼い華が出現しかなめを包み込み、華が消え去るとかなめは床に倒れ込んだ。

「……かなめは精神不安定だから、こうやってイリスの華術で眠らせるの。イリスは国一番の華術士なのよ」

ルカの説明にフェリシアーノは一筋の涙を流しながら眠る少年を見詰めた。

華の魔法を発動させたイリスは掌に乗せている金色のペンダントを強く握り締める。

「……ノーチエ」

掌に握り締めているペンダントの持ち主の名前を呟き窓の外を見据えると、既に日は微かに西に傾いていた。

## 知と光

帰宅したイリスとフェリシアーノはそれぞれソファや椅子に腰をかける。

カチカチと音を鳴らしながら時計の針は夕方の紋様を示す。

「…イリス、訊きたい事があるんだけど…」

「何、フェリ？」

「イリスにも、予言の力があるって…本当なの？」

フェリシアーノの問いかけにイリスは俯く。

「確かに、私には華の力の他に予言の力がある」

「…やつぱり、夕凧の王に…父様に狙われたの？」

「狙われたよ。私に宿る予言の力はフェリに宿る予言の力とは対の力だから」

「対の力？」

「予言にはね、二通りがあって、一つは未来を見通す力で、もう一つは光の言葉を聞き取る力。私は後者の力、フェリは前者の力を宿しているんだ」

一息つくくと、イリスは額に指をあてがった。

「『知と光が揃い、新たなる光への御霊を授かりし時、御霊授かる代償として2人の神子を捧げ奉らん』……………華の国に伝わる予言だよ」

「神子を捧げ奉らんって…まさか…」

「生贄。私とフェリ、2つの命を捧げないと新世界の鍵は手に入らないって意味…」

フェリシアーノが肩を小さく震わしたのをイリスは見逃さなかった。

「…訊きたくないよね、こんなの。でも、私は生贄としてもフェリを守る…。それが、フェイとロヴィとの約束だから」

イリスの口から零れた名前にフェリシアーノは驚きを隠すことは出来なかった。

「フェイ…。まさかフェイエルノート!?」

「知ってるの?」

その驚き様にイリスは一つの予感を感じ取った。

「まさか、フェイはフェリとロヴィの…」

「うん、俺達の姉ちゃんなんだ。でもフェイ姉ちゃんは…、父様に…」

「…知ってる…。フェイは、夕凧王に…」

一気に静寂が流れる。

時計の針は流れ続けるが2人は時が止まったかのように沈黙を守っていた。

その時、街の広場のある方角から爆音と絶叫が響く。

「街の広場から!?!」

「フェリ、行こう!?!」

イリスはチャクラム、フェリシアーノは杖を握り締めると家を飛び出し、広場へと向かった。

広場に着くと2人は息を呑む。

瓦礫の山が広がる広場の周囲には血痕と血の海が広がっていた。

途端、か細い声が2人の耳に届く。

「…うう…」

「…いたい…よ…。イリス…姉ちゃ…、フェリ兄ちゃ…、助け…」  
聞き覚えのある少女の声だった。

「アルメリアとリナリア!?!」

「フェリ、こっち!?!」

イリスは手招きをしてフェリシアーノを呼ぶ。

其処には、血を流している幼い姉妹が瓦礫の下敷きになっていた。

「清廉の華弁よ！我が声に応え、彼の者を救い賜え！風欄の息吹！」

桜色の花卉が舞った途端、アルメリアとリナリアを押し付けていた瓦礫が消滅する。

フェリシアーノが2人に回復魔法をかけると忽ち姉妹の傷が癒えた。

「うわああああん！！イリス姉ちゃん、フェリ兄ちゃんっ！！」

「わああああん！！」

2人はイリスとフェリシアーノに抱きつくとき大きな声で泣き出した。

「一体、何があつたの？」

「知らない2人のおじさんが呪文唱えたら、魔物が出て来たの！！」

「魔物が、みんなを…みんな殺しちゃったの！！お父さんもお母さんも、フィネスもティルダもファビオラも、みんな…みんな！！」

その言葉にイリスとフェリシアーノは沸々と無関係の人々を殺した男達への怒りが湧き上がるのを感じた。

だが、その怒りを抑え込むと2人は城へ続く道の先を見据える。

「アルメリア、リナリア。私達の家に行ける？」

「うん。お姉ちゃんとお兄ちゃんは？」

「俺達は城に行くよ。多分、そいつらは城に行った筈だから」

途端、アルメリアはぎゅっとイリスとフェリシアーノの手を握りしめる。

「イリス姉ちゃん、フェリ兄ちゃん、ロヴィ兄ちゃんとキラ兄ちゃん達と一緒に絶対に帰ってきてね」

「うん。約束する」

「待ってて。みんな一緒に帰ってくるから」

少女の頭を優しく撫でると、2人は城に向かって走り出した。

本当の姿(前書き)

戦闘描写抜きまくり？

## 本当の姿

城ではロヴィーノ達が魔物と応戦していた。

そんなに強くはなかったが数が多く、負傷者も出ていた。

「クソツ！これじゃキリがねえよ！」

「デュオ、油断するんやない！」

苛立っているデュオをサポートしているアントーニヨが声をかける。

「あー！糖分が足りねええ！」

「お腹すいたアル！」

「んなこと言うな！」

シンは銀時と神楽にそう言うと、目の前の敵を倒していく。

「全然終わらねえぞ、このやるー！」

「ロヴィ、後ろっ！」

レンの声にはつとしたロヴィーノが振り返ると背後に魔物がいた。

「しまっ……！！！」

「紅き月、戒めの牢！戒に囚われし光姫よ、その光を解放せよ！ル

ーン・セイレーン！」

「舞い散る華よ！光の森に潜みし生命を解放せよ！聖霊の花蓮！」

詠唱と共に深紅の閃光と空色の花卉が魔物を倒す。

其処にはイリスとフェリシアーノが居た。

「イリス！フェリシアーノ！」

「ロヴィ、油断はするなつて言つたでしょ！？」

「ゆ、油断してねえよ！」

イリスの叱りにロヴィーノは子供っぽい言い訳をする。

「もう…、私とフェリも参戦する！全員、戦闘態勢を整えよ！」

途端、イリスの双眸が血の様に紅く染まる。

「第一部隊は前線で戦闘！第二、第三部隊の術師は負傷者の回収、及び治療！第四部隊と共に第一部隊のサポート！第五部隊は城の防衛！特殊部隊の各小隊メンバーは遊撃に当たれ！」

分かり易く、無理のない命令を下すイリスにフェリシアーノは驚きを隠せなかった。

「あれが、イリスアリア・デイジー・セルフィーア。この国の光の予言者である皇女であり僕達の指揮官。他の国が知らない、イリスの本当の姿だよ」

キラが教えるとフェリシアーノはイリスを見詰める。

碧の髪はギルベルトとよく似た白銀の髪へと変わり、体からは強い魔力を放っていた。

「久し振りに見たぜ、イリスの本当の姿」

「そうね。私も、この姿になったのは何ヶ月ぶりかしら？」

ギルベルトと話すイリスは小さく笑うと、チャクラムを構える。

「お喋りはもうお終い。ヒイロ、フェリ…。バツクアップよろしく」  
「了解」

「うん、分かった」

2人が頷くのと同時にイリスはチャクラムをベルトのホルダーにかけ、鞘から深紅の刃の霊剣 フランヴェルジュを抜くと掲げあげ、声を張り上げる。

「全部隊、戦闘を開始せよ！」

その声と共に、彼等は戦闘を再開した。

「精霊の声を聞き届きし巫女、その御霊を解放せよ！フェアリー・レイ！」

ローザは魔法を放ち魔物を消滅させ、レンはナイフを急所へと投げ魔物を倒していく。

「ふおおあちゃあああつー！」

神楽は得意の格闘技で魔物を蹴散らしていると、銀時に蹴りをいれそうになった。

「神楽あああああ！！」

「戦闘に集中しろ！！」

イリスは叱咤をいれると華術を発動させ、魔物を切り裂く。

「悠久の星…その御霊に宿りし夢幻の輝きを解き放て！インフィニ

「テイ・シャイン！」

「フレイム・ラーヴァ！」

フェリシアーノの詠唱と同時にヒイロは焰の魔弾を放つ。

「疾風の刃に切り裂かれる！ウインド・ブロー！」

「翔桜斬！」

「雷破！」

解き放たれた風の刃に菊とデュオは遠距離系の攻撃を繰り出した。

漸く全ての魔物を倒したのは夜明けになってからだ。

「各部隊の隊長は部隊員を引率！特殊部隊は少し此処に残れ！」

その声に従い、特殊部隊以外の兵士は城に戻っていく。

途端、イリスの髪と瞳の色が元に戻った。

「みんな、お疲れ様」

「ああ…。十人が犠牲になっちまったけどな…」

アーサーは唇を噛みしめる。

「…けど、今悲しんだら犠牲になった人達も悲しむよ。だから、今

は前を向こうよ」

「そう…ね。キラの言うとおり、今は泣かないようにしないと…」

ぼんやりと霞む光をイリス達は見据える。

と、その時。

グルル…

獣の唸り声が響く。

はっとしたイリスはフェリシアーノの方を見ると、彼の背後に倒し損ねたらしい魔物がいた。

「フェリシアーノ、後ろ！！」

「え…！？」

振り返ると同時に魔物はフェリシアーノに襲いかかろうと跳躍をつける。

イリスは素早くフェリシアーノの前に立つと、庇うように両腕を広げた。

「ローザ、早く詠唱を！」

「駄目！間に合わない！」

ローザが叫んだと同時に魔物はイリスに襲いかかる。

その時。

「はあああああつ！」

一線の閃光と共に魔物は紫の血を撒き散らしながら倒れる。

イリスの前には金髪の青年が立っていた。

「大丈夫か、イリス？」

「ルッツ！帰ってきたのか？」

驚きを隠せないイリスは青年ルートヴィッヒを見据える。

「私達も居るよ」

ひよこつと顔を出した人の少女と1人の少年に菊は驚く。

「フランさん、レミアさん、チルノさん、それにフリージアさん

！？」

「みんな、蒼天の国から戻ってきたの？」

「うん。ルナサ、メルラン、リリカの三姉妹とルーミアは今日の昼

に帰ってくる筈だよ」

チルノの言葉に菊とリンは頷く。

一方イリスはルートヴィッヒと話していた。

「久しぶりだね、ルッツ。一年ぶりか？」

「レミア達と共に国を出たのは、二年前だ」

「あ、そっか」

あはは、と笑うイリスはフェリシアーノに向き合う。

「フェリ、彼はルートヴィッヒ。ギルの弟だ。ルッツ、彼はフェリ

シアーノ。ロヴィの弟なんだ」

「ルートヴィッヒ・バイルシュミットだ」

「フェリシアーノ・ヴァルガスです。よろしく願いします。えっと…」

「呼び方は好きでいいぞ」

「じゃあ、ルート。よろしくお願いします」

2人は握手をする。

「みんな、私の家に行こう。アルメリアとリナリアが待ってる」

イリスは声をかけると、全員はイリスの家に向かって歩き出した。

### 設定3 (前書き)

追加キャラが多いです。

### 設定3

#### 【追加設定】

・イリス・プラトリーナ

本名・イリスアリア・デイジー・セルファイア

華の国の皇女。

本名であるイリスアリアになるとき、双眸は深紅、髪は白銀になる。武器もチャクラムではなく、霊剣・フランヴェルジュに変わる。

#### 【追加キャラ】

・ルートヴィッヒ・バイルシュミット

雨の国出身の青年でギルベルトの弟。

二年前、蒼天の国へ遣いに行くレミアア達の護衛と修行の為に華の国を出た。

魔法剣士。

光の魔術と氷の魔術を扱える。

・レミアア・スカーレット

華の国出身の少女で、今では希少種となってしまうた天翼族の子供。大人びたふいんきを持つが、イリスの作った菓子や料理を見ると子

供らしさがでる。

闇の魔術の他に弾幕を操れる。

・フランドール・スカーレット

華の国出身でレミリアの妹である天翼族の少女。

姉のレミリアとは違い、七色の結晶が連なる羽根を持つ。

好物はイリスの菓子と料理。

闇の魔術と弾幕を操れる。

・チルノ

雨の国出身で天翼族の少女。

水晶のような羽根を持つ。

大らかでかなりの馬鹿。

氷の魔術と弾幕を操れる。

・ルーミア

雨の国出身の少女。

天翼族と同じ希少種である精霊族の子供。

真面目な性格。

闇の魔術と弾幕を操れる。

・バチユリー・ノーレッジ

華の国出身の少女。

生まれつき体が弱い為、あまり戦闘に出ない。  
主に図書館にいる。

全ての魔術と弾幕を操れる。

・ルナサ・プリズムリバー

歌の国出身でルーミアと同じ精霊族の少女。

ミク達とは親友で三姉妹の上。  
ヴァイオリンで戦う。

光の魔術と弾幕を操れる。

・メルラン・プリズムリバー

歌の国出身の少女で三姉妹の真ん中。

トランペットで戦う。

レンのトランペットの師匠でもある。

光の魔術と弾幕を操れる。

・リリカ・プリズムリバー

歌の国出身で三姉妹の末っ子の少女。  
イリスの菓子が大好きで、フランドールと共によく遊びに行く。  
キーボードで戦う。  
光の魔術と弾幕を操れる。

・西行寺幽々子

華の国出身の少女。  
花見が好きで、よく城の花園に行く。  
けっこう食べる。  
全ての魔術と弾幕を操れる。

・霧雨魔理沙

陽炎の国出身の魔女。  
バチユリーのいる図書館から無断で本を盗っては、イリスに叱られている。  
アーサーとは犬猿の中。  
全ての魔術と弾幕を操れる。

・博麗霊夢

華の国出身の少女で巫女。

よくカイトをからかいに行っている。  
菊と幽々子とは花見仲間。  
光の魔術と弾幕を操れる。

・フリージア・エルフィール

華の国出身で希少種であるエルフ族の少年。  
魔術は扱えないが、バチユリーから弾幕を教えてもらい、弾幕を操れるようになる。  
ルートヴィッヒとは同期の弓使い。  
弾幕を操れる。

### 【新しく出た国】

・蒼天の国

華の国とは同盟を結んでいる国。  
国民の大半は希少種为天翼族や精霊族、エルフ族。  
空に浮かんでいるため、夕凧の国の侵攻はなかった。

## 帰還

イリス達は一回自宅に戻ると、すぐさま王城に向かう。

報告や状況を国王のフローラに知らせるためであるのと、城内にある図書館に向かう為だった。

謁見の間に着くと其処にはフローラは居なく、カシスと8人の少女がいた。

「遅いぞ、イリス」

黒い服を着た少女魔理沙がイリスを見て呟く。

「魔理沙、バチュリー、幽々子、霊夢居んだ。それとルーミア、ルナサ、メルラン、リリカお帰り」

「ただいま」

ルナサがにっこりと笑いながら言う。

「カシス姉さん、母さんは？」

「お母様は緑霊村に行ったわ。どうやら村の大樹が病気になったらしいのよ」

納得したイリスはレミアアを見据える。

レミアア達は頷くとカシスに向き合う。

「お疲れ様です、レミアア。ルートヴィツヒも護衛、ご苦労様です」

「ありがとうございます」

ルートヴィツヒは頭を下げる。

「ルーミア、蒼天の王は何と言っていましたか？」

「はい、マリアージュ様は『夕凧との戦いに手を貸す』との事です。実際、蒼天の国も夕凧から発せられる魔導の影響を受けていました」その言葉にカシスは俯くと、目を閉じる。

「ありがとうございます。貴方達はゆっくり休みなさい。蒼天への遣いはカナリーに任せますから。イリス、後は宜しくお願いするわ」

「はい」

カシスが側近と共に謁見の間を後にすると、イリス達は中庭に向か

う。

中庭ではこの時期に咲く花茶の花や霊草の花が咲き乱れていた。

「いつ来ても此処は変わらないね。ね、ルート」

「そうだな。二年前とは変わっていないな。変わったとしたらイリスの大雑把さがかなり増えた事だな」

「あ、確かにそうかも」

フランドールとルートヴィツヒの会話にイリスは頬を膨らませた。

「大雑把さが増えたって、私はそんなんじゃ………なくもないかも」  
苦笑を浮かべながら呟くイリスの肩をレミアは軽く叩く。

「気にしない方がいいと思うわ」

「レミイ……、ありがとう」

「イリス、お腹すいた。お菓子ない？」

一発で空気を破壊するチルノにバチュリーは軽く叩く。

「チルノ、空気呼んで」

「うつさいなあ……。黙っててよバチュリー。なんならアタシと弾幕で勝負する？」

「遠慮する。チルノの弾幕は氷だから、花が氷漬けになるからやめて」

バチュリーは軽く流すと、庭園の奥でレンにトランプペットを教えているメルランと、2人の隣でヴァイオリンとキーボードを弾いているルナサとリリカに視線を移す。

「彼奴ら、飽きないのか？」

同じように4人を見ていた魔理沙が呟く。

「歌の国の民は、飽きることを知らないのよ。魔理沙、ミクから訊かなかった？」

「き、訊いていたよ！」

霊夢の言葉に魔理沙は顔を赤くして反論する。

「幽々子さん、今度イリスとフェリシアノ君、ルートヴィツヒさん、ロヴィーノ君と一緒に花見でもしようと思っているのですが、どうですか？」

「勿論行くわ。場所は？」

早速、花見の話をしている菊と幽々子にイリスは呆れていたが、小さく笑うとフェリシアアーノを見ると、彼はロヴィーノ、シンと一緒にルーミアと話し合っている。

意気投合したらしく、色々と話しているようだった。

「良かったね、フェリ」

小さく呟くイリスは空を見上げる。

「フェイエルノート…、あなたの約束、必ず守るよ。だから…ノーチエとあずさと一緒に見ていて…」

その呟きに応えるように一陣の風が吹いた。

精霊樹の森（前書き）

なんか原作が増えた

## 精霊樹の森

翌朝、目覚めたイリス、フェリシアーノ、ロヴィーノはリビングでくつろいでいた。

「あ、そうだ。ねえ、イリスの家って何部屋あるの？」  
ふと思い出したようにフェリシアーノが訊ねる。

イリスの家は小さい家ながらも部屋が沢山あった。

その一室の部屋を使わしてもらっているヴァルガス兄弟の部屋以外にもスカーレット姉妹やチルノ、ルーミアの部屋もあった。

「んー…私の部屋と…フェリとロヴィの部屋…レミイとフランの部屋にチルノの部屋とルーミアの部屋…後は客室が5つか7つ…かな？」

「かなりあるね…」

「三階建ての家だからね。幽々子とか菊も泊まりに…、あぁーっ！」

突然の叫び声にフェリシアーノとロヴィーノは驚く。

「ど…どうしたの？」

「今日…幽々子達と花見する約束してたの忘れてた！」

.....

「忘れるなよ！..」

間を置いてイリスにツッコミを入れるロヴィーノ。

慌てふためくイリスは台所に立つ。

「フェリとロヴィはレミイとフラン、チルノ、ルーミアを起こして！」

「判った！」

同じように慌てるフェリシアーノをロヴィーノは軽く叩くと、レミリア達を起こす為に二階へ上がる。

数時間後、沢山のおかずやおにぎり、更には沢山のクッキーやケーキ、タルト等を作り終え、巨大な弁当箱に詰め込み、紅茶、花茶、珈琲の水筒を弁当箱と同じ鞆に入れて持ったイリスと、支度を整えたフェリシアーノ、ロヴィーノ、レミアア、フランドール、ルーミア、チルノが広場に居た。

暫くすると幽々子と菊、霊夢、魔理沙、ルートヴィツヒ、ギルベルトが来た。

「イリス、お早う。かなり早いわね」

「おはよー、幽々子。実は慌ててたのさ。料理もかなり作ったよ」  
あはは、と苦笑するイリスとは対称的に幽々子はパアッと顔を明るくする。

「ヴェ？幽々子？」

「幽々子はああ見えてかなり食べるんだぜ。んで、イリスの作るご飯が大好きってワケ」

魔理沙の説明にフェリシアーノは納得したようなしてないような表情になった。

「幽々子、精霊樹の森は桜霊樹と星霊樹の花が咲き乱れてるか？」

「ええ」

「んじゃ、行きますか」

イリスを先頭に彼等は精霊樹の森に向かう。

精霊樹の森に着くとまず視界に映ったのは光の魂だった。

「綺麗…」

じつと光の魂を見ている時、その一体がフェリシアーノに近寄ってきた。

『未来の予言を司る神子ですか…。ようこそ、精霊樹の森へ』

「リリー、久しぶり」

『お久しぶりです、イリスアリア。長なら桜霊樹の所にいますよ』

「ありがとう。リリーは大丈夫？夕風の魔導は受けてない？」

『私達は大丈夫です。カシス様とフローラ様、長のおかげで魔導の影響はありませんから』

妖精リリーホワイトは弱々しくはにかみながら答える。

夕風が放つ魔導の影響で、かなり弱っている事が目に見えた。

「そっか…。でも、異変が起きたらすぐに知らせて」

コク、とリリーホワイトは頷くと森の奥に姿を消した。

「…夕風は一体、どれだけの罪のない人達を苦しめるんだろう」

フェリシアーノは呟く。

「最終手段として夕風は『破壊魔導』を使うつもりなんだろうな」

ルートヴィツヒの言葉にイリスは唇を噛みしめる。

「破壊魔導…。無垢な魂を魔導波へと変え、全てを破壊する暗黒魔法。その贄としてフェイ、あんず、ノーチェが殺された…。彼奴が破壊なら私は…」

「『破戒ノ華』を使うつてのか」

俯くイリスにロヴィーノは怒りを露わにする。

「お前…忘れたのか？予言者のお前を守るために破戒ノ華を使った

彼奴の…、サクラの最期を！？」

「忘れるわけない！サクラが死んだあの日は！」

「兄ちゃん、イリス落ち着いてよ！」

慌てて言い争いを止めようとフェリシアーノは2人の間に入ったが、言い争いは激しさを増す。

「お前は何時もそうだ！自分を犠牲にして何が変わるってんだ！？」

「ロヴィには判んないよ、あの時の私の気持ちなんて！私は…！」  
『お止めなさい、ロヴィーノ、イリスアリア』

2人の言い争いを止めたのは、ふんわりとウエーブがかった長いサファイアカラーの長髪の女性：精霊樹の森の長、デルフィニウムだった。

「デルフィニウム…」

『イリスアリア、貴女はサクラと同じ悲しみを繰り返すと云うのですか？』

違う、とイリスは呟く。

「…違う…違う違う違う違う！私はサクラと同じ悲しみを繰り返したくはない！けど…最大の禁忌華術：『破戒ノ華』じゃないと…破壊魔導は消滅しないんだ…」

その声は儚げに聞こえ、誰もが俯く。

「ねえ、どうすれば華術を扱えるの？」

「華術は…イリスやサクラ…『華の神子』と呼ばれるが扱う事を許されたモノ…。誰でも扱える術ではないのよ」

幽々子の言葉にフェリシアーノは俯く。

「確かにそうね。でも、フェリシアーノならサクラと同じ華術師になれるかもしれないわ」

「え？」全員の視線が一気にレミリアに集まる。

「『なれるかも』だから断言は出来ないけど、でも可能性はあるわ。サクラは彼と同じ予言の能力を持っていたしね」

「じゃあ、フェリは『臨星の華』を持っている可能性が？」

「まだ判らないわ。この事は彼に聞いてみないとね」

「アルトさんですね。確かに彼なら判るかもしれませんが。サクラと同じ村の出身でしたし」

納得する菊。

「ランカとシエリルにも会えるかな？」

「チルノ、それ今は置いといて」

目を輝かせているチルノに突っ込むルーミア。

「とりあえず明日、アルト達に会いに行きましょう。後はそれからよ」

一気に場をまとめる幽々子の言葉にイリスは頷く。

その後、彼女達は花見を楽しんだ。

だが1人フェリシアーノは胸騒ぎを覚えていた。

(何だろう…。嫌な予感がする…)

フェリシアーノが感じ取った予感はいリスも感じ取っていた。

(…明日は、警戒したほうが良さそうね…)

イリスは目を綴じる。

世界は闇に染まり、辺りに漂う匂いは弱々しい、遠くから発せられる麝香の様な匂いに変わった。

## 過去の後悔

翌日、イリス達は蒼蓮村に向かった。

蒼蓮村は『臨星の華術師』と呼ばれた少女サクラ・カノンの出身村であり、『華術師の里』と呼ばれ、様々な華術師が暮らす村だ。

村に入るとふわりと甘い香が漂ってきた。

「…香草の匂い。サクラと同じ…」

「あつ、イリスだ！」

入口に佇んでいたイリスに気付いた村の子供の1人が此方に駆け寄って来る。

「イリス、久しぶり！サクラの墓参りに来たのか？」

「あ…まあ、ね。楓、アルトはいるかな？」

「アルトならリリと話してる」

楓が言った人の名前にイリスは俯く。

「…リリは私の事、憎んでるよね」

「リリはイリスの事、憎んでなんかいないよ。一回話をしてみたら

…」

「リリにとってサクラはたった一人の肉親…、大切な妹だったんだよ？私は彼女を殺したのも同然だよ…」

「イリス…」

フェリシアーノはじつとイリスを見つめる。

「…サクラの墓参りに行ってくる。ロヴィ達はアルト達の所に先行つてて」

「あ、イリス！」

フランドールが呼び止めるが、イリスは村の奥へと走っていった。

「やっぱり…イリスは気にしているのね」

レミリアは俯きながら呟く。

じつとイリスが走り去っていった奥を、ロヴィーノとルートヴィッヒは見据えた。

白い花弁が舞う墓地にイリスは居た。

彼女は前に佇んでいる墓石に刻まれた少女の名前をなぞる。

墓石に刻まれている名前は『サクラ・カノン』。

嘗て『臨星の華術師』と呼ばれた華の神子の少女で、数年前、イリスを魔導から守るために禁忌華術を使用し、命を落とした。

「…サクラ…」

「あれ？其処に居るのってイリスちゃん？」

イリスは背後を振り返ると、其処に緑の髪の少女が花を入れた籠を持って立っていた。

「ランカ…」

「久し振り！元気にしてた？」

「……………」

「イリス…ちゃん？」

俯くイリスの表情が曇っているのにランカは気付いた。

「どうしたの？顔色よくないよ」

「ランカ…私が生きている意味は何？」

「えっ？」

「判んないよ…何で私は予言者として生まれたのか…創星の華を宿して生まれたのか…意味が…生まれてきた意味が判んないよ…教えてよ…誰か教えてよ…私が生まれてきた意味と理由が…判んないよおっ！！！」

ポロポロと涙を零しながら理由を求めようと叫ぶイリス。

するとランカはイリスを優しく抱きしめた。

「…判らなくて、いいと思うよ」

「え？」

一瞬だけ、その言葉に理解が出来なくなった。

「生まれてきた理由と意味なんて判らなくていいの……。そうして人はみんな生きているんだから」

「ランカ……」

「そうよ。イリス」

不意に名前を呼ばれ、イリスは背後を振り返る。

其処には白銀の髪をショートカットに切った少女が居た。

「リリ!?!」

「確かに妹は……サクラは死んだ。けどね、あの子は自らの意志で、命を捨てる覚悟で貴方を守る事を決めたの。私は貴方を憎んだりはないわ。あの子が死んだのは、貴方を守るために命をはったからよ」

何度も語ったリリの言葉。

だがイリスはずっと頑なになっていた。

「……誰をも許し、民を愛する優しさを持っているから気にしているのね」

リリはじつとイリスを見据えながら呟く。

「お前がそんなんで、どうすんだよ」

「ロヴィーノ君」

ランカは後ろに立っていたロヴィーノとフェリシアーノに気付いた。

「……と、貴方は?」

「此奴はフェリシアーノ。俺の弟だ」

「ロヴィーノ君の弟……。じゃあ貴方が『言霊の予言者』なのね。私はランカ・リー。この蒼蓮村に暮らす『歌風の華術師』なの」

「私はリリ・カノン。『聖刹の華術師』」

リリとランカが自己紹介すると軽くお辞儀をし、フェリシアーノの視線は俯くイリスに向けられた。

「イリス……なに何時までもズルズル引き摺っていんだよ。いつまでたっても変わらないぜ」

「……………」

「お前が不安になっていると民も、国も、サクラも不安になるんだぞ」

「!?!」

イリスはバツと顔を上げる。

其処には強い光を帯びた瞳を持ったロヴィーノが居た。

「昔、お前、みんなに言ったよな。『1人が不安になると、みんなが不安になる』って」

「…あ」「今、そうなってんだ。イリスが不安になってるから、全員不安になってる。お前、フェリシアーノを守って決めたんなら、自己犠牲以外の守り方をしろ」

厳しさと優しさが入り混じった言葉。

イリスは思わず涙を零す。

「…そう…なのか…?」

すると苦笑を浮かべたロヴィーノが近寄り、幼子を慰めるようにイリスの頭を撫でる。

「そつだ。だから何時までもグズグズしてんな」

「…ありがと…う…」

泣きながら、笑みを浮かべながらイリスは呟く。

「よし、じゃあ、アルトのここに行くぞ。みんな待ってるからな」

「うん」

ゆっくりと立ち上がり頷くと、ロヴィーノは小さく溜息をつく。

「…つたく、流石イリスアリア姫だな。立ち直りが早すぎだつて」

「私は姫でも戦姫。何時までもグズグズしてられないわ」

「ホントに立ち直り早いね」

「でも、そこがイリスの良いところだよ」

「ふふっ、そうね」

五人は笑いあつた後、目的地に向かった。

## 存在しない華・同じ華

目的地に辿り着いたイリス達は、とある民家に入る。

中には先に行っていたルートヴィツヒ達と青年と少女が居た。

「遅かったな」

「ごめん。漸く気持ちの整理が出来たからもう大丈夫だよ」

その言葉にルートヴィツヒは安心したような表情になる。

「よう、イリス。久し振りだな」

「久し振りね、アルト。そう言えばシェリル達は？」

「シェリルとミハエルはデルフィニウムとこ行ったぜ。リースと

リユナは精霊が心配だからって『聖晶の洞窟』に」

「やっぱりリー達だけじゃなく、彼等にも影響が出ているのか」

「ああ。カーバンクル、シルフ、サラマンダー、ウンディーネ、ド

ライアード、ノーム、ウィル・オ・ウイプス、オーロラ、スノウ、

シェイド…更には『精霊のたまご』、精霊の源であり飯の『マナ』

にも影響が出てる」

イリスはアルトの語る言葉に唇を噛みしめる。

「たまごとマナにまで…」

「カシス姫様やフローラ様のお陰で精霊達は安定を保っているよ。

けど、夕凧の国が放つ魔導を何とかしないと…」

「ごめん…」

ランカの言葉にフェリシアーノは謝り、慌ててランカは手を振る。

「フェリシアーノ君が謝る必要はないよ！」

「そうだよ。フェリが悪いんじゃないんだからさ。気にしない、気

にしない」

「ランカ、チルノ」

小さく「ありがとう」とフェリシアーノは呟く。

と、アルトはフェリシアーノの内に何かを感じ取った。

「アルト？」

「イリス、フェリシアーノは『華』を持つてる。しかも、サクラがその内に宿していた『臨星の華』だ」

「!!!」

イリスは驚きを隠せなかった。

亡くなったサクラがその内に咲かしていた華が、フェリシアーノの内に咲いている事に。

華術師が死する時、その身に宿す華は宿主が死ぬと同時に消滅する。つまり、同じ華術師でも同じ華は咲かない。

だが、フェリシアーノの内に宿る臨星の華は、死んだサクラが咲かしていた臨星の華で、嘗てない異例のパターンだった。

「嘘…。『華』に『同じ個体』は『存在』しない。姿力タチが同じ華はあっても、似たような華は無い」

「俺もその事は判ってる。けどな、フェリシアーノに宿る臨星の華は、確かに『サクラの臨星の華』なんだ」

イリスは呆然とし、フェリシアーノを見据える。

暗い闇が包む空間、少女は1人歌う。

「…『存在しない華』の星詠みの神子、『同じ個体の華』の言霊の神子…見つめ、御霊を捧げた新たな世界はココロが欠けた不完全な世界…ココロ欠けた新たな世界…月の雫が滴り落ち、太陽が涙を流し、星の泉が満ち溢れる…また2人、新たな神子が生まれ落ちた…眠れぬ夜に哀しむ血のごとく紅き月…目覚めぬ朝に消え去る儂き蒼き太陽…戒の呪縛に縛られた終わらぬ狂詩曲を私は謳う…」

歌う少女の胸元に輝く銀のペンダントに刻まれた名は

『サクラ・カノン』

## 六つの華

アルトの話に驚きを隠せなかったのはイリスだけではなかった。サクラの華を宿すフェリシアーノも、ルトヴィツヒ、菊、レミリア、フランドール、チルノ、ルーミア、幽々子、魔理沙、霊夢、ギルベルト、リリ、ランカも驚いていた。

「…ありえないわ。サクラの華は『あの日』確かに消滅したのよ」リリは首を横に振り否定する。

「アルト、ランカ…フェリの華、取り出せる？」

「今すぐは無理だよ。シエリルさんとミシエル君、リースちゃんとリユナちゃんがないもん」

「取り出した事のない個人の華は『幽玄』『双廉』『鳴鈴』『黎翔』『歌風』『刹那』の力を合わせないと取り出せない事は、イリスも知ってるだろ」

そうだけど、とイリスは呟くと考え込む。

と、ある考えが浮かんだ。

「『創星』…私の華は使えない？」

「イリスちゃんの華？確かに『創星』は全ての華とは違う『存在しない』力を持つけど…」

「…やっぱり無理ね」

「それはそうだろ」

「きっぱり言わなくてもいいじゃん…」

きっぱりと言い張るアルトに、しゅんとなるイリス。

2人の会話にランカは「仲が良いだねえ」と語る。

その後2人に怒られたが。

フェリシアーノに宿る臨星の華が、本当にサクラに宿っていた臨星の華かどうか調べる為には彼に宿る華を取り出す事しかなかった。

だがその力を使うには、アルトに宿る『刹那の華』、ランカに宿る『歌風の華』の他に『幽玄の華』、『双廉の華』、『鳴鈴の華』、

『黎翔の華』の力が必要だった。

『幽玄の華術師』シエリル、『双廉の華術師』ミハエル、『鳴鈴の華術師』リース、『黎翔の華術師』リユナが居ない今、真相を知るのは難しい。

今は不在の4人を待つしかない、誰もが思ったその時。

外が異様に騒がしく、同時に禍々しい気配が流れた。

「たっ、大変だ！」

慌てふためく男性が家の中に入ってきた。

「どうした!？」

「さ…サリエルとレミエルが、自我を失って村を破壊しているんだ！」

「サリエルとレミエルが!？まさか魔導の影響…」

「考えるのは後にして、アルト!村人は大丈夫なの!？」

イリスは男に向かい叫ぶ。

「は、はい!精霊樹の森に避難させました!」

「わかった。2人を押さえている華術師達も避難するように指示して。後は私達に任して貴方達も避難を」

「わかりました、イリス様!」

男は強く頷くと家を飛び出した。

外から匂う薫りが甘い匂いから血汐の匂いと異臭へと変わっていった途端、イリスの髪は白銀、双眸は深紅へと変わる。

「行こう。サリエルとレミエルを助けに」

イリスはそう言う外に出、先に出た彼女の後をフェリシアーノ達は追った。

## イリスの歌

焰が舞い上がる広場。

夕風の放つ魔導の影響で自我を失った2人の天使が暴れていた。

広場に辿り着いたイリス達はそれぞれの武器を構える。

城に救援要請を入れたが恐らく間に合わない。

最大限、食い止める為にイリス達は戦う事を決めた。

「サリエル！レミエル！お願い止めて！」

ランカは必死で天使の暴走を止めようと叫ぶが、自我を失った2人に彼女の叫びは届かない。

アルトは手にしていた銃剣の柄を握り締める。

やるせない気持ちになったランカも白木の弓を構え、矢を引き絞る。地にフランヴェルジュを突き刺したイリスは深く息を吸う。

「…夢見た世界は闇へと消える。フラジールの祈りは儚く解ける…」  
突然、歌い出したイリス。

歌い始めたのと同時に辺りに白い羽根が舞い散り、彼女の背に白い翼が生えた。

その様子に驚き、呆然としたフェリシアノ。

「あれは創星の力。イリスに宿るもう一つの華…『神歌の華』を使って具現化したモノだよ」

フランドールはジツとイリスを見据えながら語る。

イリスには、二つの華が宿っている。

存在しない力を操る『創星の華』と、全ての華術を操る『神歌の華』。

『イリス・プラトリーナ』と云う『神歌の華術師』。

『イリスアリア・デイジー・セルフィーア』と云う『創星の華術師』。

『プラトリーナ（希望）』と『アリア・セルフィーア（祈り）』。  
希望と祈りの花『イリス』の名を持ち、二つの華を宿す華の皇女。

イリスの白い翼からは強い光が放たれる。

「…月夜に沈め、哀しみに暮れる神。その光はけして喪われない事を誓おう。古のコトバを抱いて…」

澄み切った風のような、天空のような歌声。

そんな歌声に似あわない焰舞い上がる光景。

自我を失った天使と、歌い祈る皇女。

誰もが息を呑む光景だった。

途端、サリエルはイリスに光弾を放つ。

アルトはすかさずイリスの前に立ち、光弾を弾く。

「おい！ボサツとしてるな！サリエルとレミエルを元に戻すためには『イリスの歌』が必要なんだ！イリスを守るぞ！」

「判った！」

フェリシアアノは頷くと詠唱を始めた。

ルートヴィツヒ、ギルベルト、ロヴィーノ、菊はアルトと共に接近戦。

ルーミア、チルノ、レミアア、フランドール、幽々子は弾幕で応戦し、ランカ、フェリシアアノ、リリは魔術や華術で応戦した。

レミエルの攻撃が全方位に放たれ、リリはすかさず結界を張るが、一つが結界を破壊しイリスを襲いかかる。

「イリス！」

「清廉の結界！」

青年の声が響きイリスの周りに結界が張られ、攻撃を防ぐ。

そして、サリエルとレミエルの足元に魔法陣が浮かび上がり、2人の動きを封じ込めた。

「ふう…。危なかったな」

「危機一髪ってところかしら」

「…リユナ、あの2人」

「うん、リース。2人は、あの力に侵されてる」

「ミシエル君！シエリルさん！リースちゃん、リユナちゃん！」

背後に現れた青年と女性、少女2人にランカは驚く。

「ミハエル、シェリル、リース、リユナ！来るのが遅い！」  
苛立ちを隠せないアルトが叫ぶとミハエルは小さく笑う。

「俺達はデルフィニウムの所に居たんだ。それに、リース達は精霊の様子を見に行った。遅くなるのは当たり前だろ、アルト姫？」

「てめえ…喧嘩売ってんのか？」

「アルト！ミハエル！戦闘に集中しろ！」

ルートヴィツヒの言葉にアルトは渋々喧嘩腰を抑える。

「了解、ルートヴィツヒ隊長」

「ミハエル、後で覚えてるよ？」

ギツとミハエルを睨むアルトが呟く。

「まったく、喧嘩してんなよ。喧嘩ばかりだと、やってられなくなるぜ」

「魔理沙も少しは集中して」

霊夢は呟くとレミエルに向かって弾幕を放つ。

サリエルはレミエルに向かって放たれた弾幕を結界で防ぐ。

終わりが見えない攻防戦。

だが、遂に終わりを迎える。

「…錆び付いた刃には遙かな煌めきが宿る。祈り捧げる神を貫くのは…その光…。終わり無き夢想曲…未来を見つめる瞳に願いを込めて…」

イリスが歌い終えた途端、無数の花卉が天使達を包み込み、巨大な水晶の華を形成する。  
クリスタル

華が舞い散ると、其処には横たわる天使が居た。

正気に戻ったサリエルとレミエルが唸りながら起き上がると同時に、イリスはガクンと膝を折る。

「イリス！」

フェリシアーノは慌ててイリスに駆け寄り、支える。

「…大丈夫？」

「うん…。華術を操る時、精神力を使うの。二つの華を操るなんてかなり精神力を使うものなのよ」

白銀から元の碧色の髪に戻ったイリスは、少し苦しげな笑みを浮かべる。

暫くして、アントーニヨ達が来、全員は村の長を訪ねる事にした。

悪魔の華（前書き）

長の会話が…

## 悪魔の華

村長の家には村の長と、正気に戻ったサリエルとレミエルが居た。

「イリス、ありがとう」

ふんわりと笑いながら礼を言うレミエルと、小さく会釈するサリエル。

「レミエル、サリエル」

「何、フラン」

「2人が自我を失った原因って、魔導の影響なの？」

フランドールの質問に2人は俯くと、微かに頷く。

「確かに私達は夕凧の魔導で自我を失ったわ。けど、何かおかしいのよ」

「おかしいって？」

「夕凧の魔導には、何かが混じってる感じがするの。そう、『悪魔の華』と同じ波動の」

「悪魔の華って、闇の国に咲く華でしょ？ルシア女王の許可ナシに採ることは出来ない筈だよ」

イリスは怪訝そうに言う。

悪魔の華は闇の国に咲く特殊な華で、睡眠薬として利用される華。だが魔術的な価値もあり、呪いを使うときにも利用される。

そんな事から闇の女王ルシアは悪魔の華の採取に制限を設けた。

「でも、ルシア様の眼を逃れて悪魔の華を育成している人もいるらしいよ。悪魔の華は条件さえ揃えば他国でも育てられるから」

「ルーミア、何で知ってるの？って、そうか。ルーミアのお母さんは闇の国出身だったね」

フランドールの言葉にルーミアは頷いた。

「夕凧の国で悪魔の華を育ててるか、その違法を犯している人から輸入してるかになるわね」

「そうだね」

レミエルとサリエルはうなずき合う。

「…ねえ、みんな」

「何、イリス？」

「あのさ、フェリに咲いている臨星の華の事、忘れてない？」

イリスの一言で訪れた沈黙。

「……あ」「……」

「…忘れてたな…」

全員の声にイリスは苦笑を浮かべた。

その後、長とサリエル、レミエルと別れたイリス達は、フェリシア  
ーノに宿る華を調べるために『華星の神殿』に向かった。

## 臨星の華と無の華

村を出て、イリス達は白い花が咲き乱れる草原にポツンと聳え立つ神殿『華星の神殿』に着いた。

神殿と云うよりも塔と云った方が良いというかんじの建物に入ると、澄み切った空気が辺りを漂う。

神殿の最上階へと向かうと、複雑な魔法陣が描かれた床と、目の前にある祭壇に置かれた石像の前に立つ1人の少女がいた。

『イリスアリア姫、ようこそ』

「華の守護神フェナサイト・シード。訊きたいことがある」

『フェリシアーノ皇子の華についてかしら？』

フェナサイトの言葉にイリスは頷く。

『けど、訊くよりも、みた方が早いわ。魔法陣を使いなさい。話はその後で』

そう言うとフェナサイトは、祭壇に置かれたユニコーンを模した石像の上に乗る。

途端、魔法陣が輝き出す。

「フェリ、魔法陣の真ん中に行って立って。貴方の中にある華を調べるために華を取り出すから」

「う…うん」

不安げになったフェリシアーノの肩をイリスは軽く叩き、勇気づける。

気分が少し楽になったフェリシアーノは恐る恐る魔法陣の中央に向かい、立つ。

その後、アルト、ランカ、シエリル、ミハエル、リース、リュナはそれぞれ『刹那』、『歌風』、『幽玄』、『双廉』、『鳴鈴』、『黎翔』と古代文字が書かれた場所に立つ。

「フェナサイト」

『判っていますわ』

イリスに促されたフェナサイトはフェリシアーノの近くに寄る。

『地の精霊、水の精霊、焔の精霊、風の精霊、雷の精霊、樹の精霊…六つの御霊の力を借り、今此処に立たん神子に咲きし神の華を見せたまえ…フェナサイト・シードの名の下に咲き乱れよ…』

フェナサイトが詠唱を終えた途端、フェリシアーノの胸元から光に包まれた薄い紅色の華が現れた。

『…サクラに宿っていた臨星の華です…』

「やっぱり…」

『…サクラは彼に『返せた』のですね。華を』

「え…?」

「返せ…た?」

意味不明な言葉に全員の視線はフェナサイトに集まる。

『サクラに宿っていた臨星の華は、本来は言霊の神子に宿る華です…』

…』

「でっ、でも！サクラも言霊の神子の力があつたよ!?!」

理解が出来なくなったフランドールは叫ぶ。

『サクラにあつた力は『予言』ではなく『預言』…。預言の力は、

神からの言葉を授かる言霊の神子の力と酷似した力なのです』

冷静を失ったイリス達とは対称的に、落ち着いて語るフェナサイト。

『臨星の華の仮宿主となった預言者は、本来の宿主である言霊の神子に華を返す役目があります。サクラはその使命を理解し、華をフェリシアーノ皇子に返したのです』

「じゃあ、あの時…サクラが死んだ時に消滅した華は?」

『あれは『無の華』。神子に返した時に咲く、膨大な力を一時的に解放させる能力しか持たない虚いの華。サクラは無の力と生命を解放して、破戒ノ華を発動させたのです』

その言葉に全員は啞然とした。

臨星の華を本来の宿主であるフェリシアーノに返したサクラに宿った無の華。

その華の波動と生命を解き放って、サクラは禁忌華術を発動させた

のだ。

だがサクラは全員にその事は伝えなかった。

これは自分の使命で、誰の手も借りてはいけなさと感じ取り、言えなかった。

そして、サクラは夕凧の国に遠征についた時、相手の隙をついてフエリシアアーノに華を返した。

無論、当の本人が眠っている間に。

イリスが危険に陥った時、サクラは生命を犠牲にして禁忌華術『破戒ノ華』を発動させ、息絶えた。

真実を知った全員は黙っているしか出来なかった。

真実を知って何も言えなかった。

サクラの心と歌（前書き）

… 悪魔の華、存在忘れてた（苦笑）

ダメじゃん、俺。

## サクラの心と歌

華星の神殿を後にしたイリス達は沈黙を守っていた。

悪魔の華の事もフェナサイトに聞いて、夕凧が悪魔の華を育成していることも知った。

だが、それとは別。

彼女達はサクラが使命の事を言えなかった理由を考えていた。

「あたし、サクラの気持ち、判るよ…。サクラ、辛かったと思うんだ…。言いたくても言えなかった事溜め込んでいた筈だから…」

「チルノ…」

「あたし達にだって言えないことはある。サクラは、死んじゃうかもしれないような重い使命を黙っていた…。あたしがサクラの立場になったら、誰にも言わない…。言ったら迷惑を掛けそうって思うもん…」

チルノの言葉に、その場に居る全員が俯いた。

皆、チルノが言ったように、サクラの立場を考えていた。

結果、チルノと同じ、誰にも言わないと云う事に全員が辿り着いた。

「…サクラ…」

イリスは空を見上げ、思わず彼女の名を呟いた。

その頃。

漆黒の闇の中、サクラの名が刻まれたペンダントを胸元に提げている少女はまだ歌っていた。

「儂い世界は闇へと消えてく、光の欠片は泡沫の果てへ。歪んだ心は刃で貫かれ、偽りのコトバ胸に抱いて、虚無に包まれ消え果てる

…。諸刃の剣は闇の悲しみのフラジール、夢見た世界は漆黒へ解けてった…。さ迷う魂は水底に囚われ凍てついた、泉の水は幻の花と変わり果てた…」

「…サクラ、また歌っていたの？」

「フェンネル、うん。フランドールに教えてもらった歌を私なりにアレンジした歌」

サクラと呼ばれる少女は目の前にいる少年、フェンネルにそう言う。フェンネルはフェナサイトの弟で、魂の守護神。

靈魂の都と呼ばれる異次元空間に存在する場所で天に向かう魂の管理をしていた。

「サクラ、帰りたい？」

「フェンネル、私はもう死んでるし、華術師でも預言者でもないの。帰る理由なんてないよ…」

突き放すようにサクラは言うが、言葉は悲しみを帯びていた。

あの日、サクラはイリスを守るために禁忌華術『破戒ノ華』を発動し、死んだ。

だが、サクラの魂はあるべき場所へは還らず、靈魂の都でさ迷っていた所をフェンネルに助けてもらった。

フェンネルはあるべき場所へ還らないサクラに違和感を感じ、調べたところ、サクラは肉体が精神体と同化し、所謂、魂だけの存在となっていた。

彼は元の世界にサクラを帰そうとしたが、彼女は自分が死んだ事とタダの人間になっていてる事を理解していた。

そのため、サクラは元の世界には帰らず、フェンネルの手伝いをしている。

フェンネルはサクラが元の世界へ帰りたいと思っているのを感じていたが、当の本人は頑なに帰る事を拒んでいた。

サクラは「あつちでは自分は死んでるのに、いきなり生き返ったらみんなに怖がられる」とだけ言うだけで、本当の理由は教えなかった。

フェンネルは呆れていたが、真の理由を理解していた。

『…無理はしないでよね』

「判ってる。いこ、フェンネル」

心配するフェンネルの手をサクラは繋ぎ、歩き出した。

（本当は無理して行くせに…）

ひっそりとフェンネルは思いながら歩いた。

## フローラの手紙

城下町のイリスの家に戻ってきた、イリス、フェリシアーノ、ロヴ  
イーノ、チルノ、ルーミア、レミア、フランドール。

会話は無く、誰もが沈黙を守っていた。

すると、家の扉がノックされる。

「はい…」

イリスが扉を開けると其処には一人の少年がいた。

「姉上、僕です」

「…エルバ？」

「母上から書状を渡すように云われました」

エルバは手にしていた書状をイリスに渡すと、一礼して家を離れた。  
途端、全員がイリスを囲む。

「イリス、それは書状？」

ヒヨイとイリスの手元を覗き込んだフランドールが訊ねる。

「ううん、書状よりも手紙に近い。…読むよ」

イリスは封筒の封を切ると中にある手紙を読む。

イリス、真実を知ったのならフェリシアーノと共にある場所  
向かい、其処にある試練を乗り越えて、神器を手に入れなさい。

試練は貴方にも、フェリシアーノにも辛いもの。

乗り越える覚悟があるのなら、行きなさい。

世界を、夕風を含む全てを救いたいのなら新たな力を授かりなさい。  
貴方達なら出来るわ。

あの神子の姉弟の生まれ変わりである貴方達なら。  
場所は靈魂の都。

其処にいるフェンネルに会い、試練を受けなさい。

手紙の内容に、イリス達は何かを感じ取った。

その何かは判らないが、イリスとフェリシアーノにとっては何故か懐かしい感覚に陥らせるモノ。

封筒に手紙を仕舞うとイリスはフェリシアーノと向き合う。

フェリシアーノは真剣な眼差しでイリスを見据える。

「イリス」

「判ってる、フェリ。行こう。私達が何で予言の力を授かったのか…夕風を変えられるのなら…今、此の世界で起こっている事柄を知るいい機会だからでしょ？」

「うん。もし、夕風が変えられるのなら俺は行く。辛いものだとしても、乗り越えられるなら…」

「行くんだね。イリス」

突如聞こえた声にイリス達は振り返ると、其処にはミクと青い髪の青年がいた。

「ミク、カイト」

「靈魂の都に行くのなら、判ってるよね？」

「判ってる。歌の国に受け継がれる『魂の追想曲』…。それを奏でる歌姫のミクと、ルナサ、メルラン、リリカの楽器の力が必要だつて」

「判ってるみたいだな」

「じゃつ、私と兄さんは場所は夢見の遺跡。待ってるからね、イリスアリア、フェリシアーノ」

ミクとカイトが家を出た後、イリスは一息はく。

「…辛い試練…。私達の過去に関係するモノかな…」

「フェイ姉ちゃんの幻と戦う…とか？」

「あり得る。もしかしたら二度と生きては帰れない戦い…」

「ヴェ…」

フェリシアーノは俯く。

「とても辛く、とても厳しい試練…。でも…、受けないと駄目だよ」

「そうだね。コレを受けないと、みんなを助ける事も出来ないから…。行こう、イリス」

「うん。世界を…夕風の魔導を破壊するために…」  
2人は頷くと、ロヴィーノ達に向き合う。

「はあ…どうせ俺達が止めたって行くんだろ？」

溜息混じりにロヴィーノは呟く。

「行ってらっしゃい！イリス、フェリ！」

「アタイ達、待ってるからね！頑張つてよ！」

応援するフランドールとチルノ。

「頑張りなさいよ」

「帰ってきたら試練の内容教えるよな、イリス！」

「魔理沙は黙つてて」

霊夢に叩かれる魔理沙。

「靈魂の都には妖夢が居るはずだから、彼女に私は元気だつて伝えて置いて」

「判つた、幽々子」

イリスは幽々子からの伝言を覚えると、チャクラムをテーブルの上に置く。

「フランクヴェルジュだけ持つてくのか？」

「うん。二つの華を制御する（操る）に武器は一つだけでも十分だからさ」

にっこりと笑うイリスはロヴィーノの質問にそう答えると、入り口に向かう。

フェリシアーノも慌ててイリスの後を追いかけた。

ふと、扉のノブに手をかけると2人は後ろを振り返る。

「行って来ます」

そう言うと2人は家を出た。

イリスとフェリシアーノが居なくなった部屋に、微かなイリスの花とフィラの花の香りが漂った。

## 設定 4

### 【キャラ紹介】

・サクラ・カノン

華の国出身の少女。

言霊の力とよく似た預言の力を持っていた華術師。

身に仮宿りしていた臨星の華をフェリシアーノに返した後に無の華が咲き、華の力と生命を解放してイリスを守った。

だが、魂と肉体が同化し、霊魂の都で仮住まいをしている。

武器は剣。

・リリ・カノン

華の国出身の少女でサクラの姉。

聖刹の華を身に宿す聖刹の華術師。

戦闘でかなりの実績を持ち、一瞬で敵を殲滅する事から『刹那の術師』と呼ばれる。

武器は杖。

・リース・カノーパス

華の国出身の少女でリュナの妹。

黎翔の華を身に宿す黎翔の華術師。

相棒である光の精霊ウィル・オ・ウィプスのリリアと共に戦場で傷

付いた兵士達を癒やす精霊術師でもある。

『光霊華の術師』の称号を持つ。  
武器は杖。

・リユナ・カノープス

華の国出身の少女でリースの姉。

鳴鈴の華を身に宿す鳴鈴の華術師。

相棒である闇の精霊シェイドと共に敵を殲滅する精霊騎士。

『闇霊華の騎士』の称号を持つ。  
武器は剣。

・ランカ・リー

華の国出身の少女でサクラとは同期の華術師。

歌の国出身の母を持つ。

歌風の華を身に宿す歌風の華術師。

明るく、歌う事が好き。

キラと同じで争うことは好まない。

武器は弓。

・早乙女アルト

華の国出身の少年。

刹那の華を身に宿す刹那の華術師。  
少女と見間違える程の顔立ちで『アルト姫』とからかわれる事がある。

イリスとは旧友の仲。  
武器は銃剣。

・ミハエル・ブラン

華の国出身の少年でアルトとは幼馴染。  
幽玄の華を身に宿す幽玄の華術師。  
ルートヴィツヒが居る部隊に入隊している。  
アルトの事をよくからかっている。  
武器は剣。

・シェリル・ノーム

華の国出身の少女。  
双廉の華を身に宿す双廉の華術師。  
ランカと同じで母が歌の国出身。  
高飛車な性格だが芯は優しい。  
生命をかけてイリスを守ったサクラに憧れを抱いている。  
武器は双槍。

## 靈魂の都

華星の神殿に程近い夢見の遺跡に着いたイリスとフェリシアーノ。狭そうな外見とは裏腹に中はかなりの広さがあった。

先に着いていたミク、カイト、ルナサ、メルラン、リリカは2人が来た事に気づき、振り返る。

「遅いよ、イリス、フェリシアーノ」

リリカはフワフワと宙に浮いているキーボードの鍵盤をコツコツ叩きながら言う。

ルナサはヴァイオリン、メルランはトランペットを持って待っていた。

ミクは確認していたらしく、古代文字が書かれた楽譜を持っていた。カイトはと言うと、床に描かれた魔法陣の点検をしていた。

「ごめん、みんな。カイト、魔法陣は大丈夫なのか？」

「ああ。準備は整っているよ。イリス、フェリシアーノ、魔法陣の真ん中に立って」

コクンと頷き、イリスとフェリシアーノは魔法陣の中央に立つ。

そして、ミク、ルナサ、メルラン、リリカはそれぞれの立ち位置に立った。

ミクは深く息を吸うと歌い始め、歌に合わせてプリズムリバー三姉妹は楽器を鳴らす。

透き通った歌声は空間を揺るがし、光を放つ楽器の音色は異空間へと繋げる。

歌の国に伝えられている魂の追想曲は、歌の姫君の声、光楽器の音色が奏でる繋の曲。

その音色は靈魂の都への鍵となり、華術師は試練へと向かう。

だが、その試練を越えた者はおらず、帰ってきた術師はいなかった。「フェリ。失敗したら二度と帰れないよ。それでも行くの？」

その事を思い出したイリスがフェリシアーノに訊ねる。

「俺は行くよ。試練は乗り越えるモノ、でしょ」

フェリシアーノの答えにイリスは思わず吹き出す。

「ふっ…。そうね」

イリスは何時の間にか白銀の髪と紅い双眸へと変わっていた。すると空間に歪みが生じた。

「ゲートが開いた…。靈魂の都へと繋がったよ」

カイトはそう言うのと表情を引き締める。

「靈魂の都に入ったら、試練をクリアしない限り出られない。覚悟はあるのか？」

「何を今更。試練は乗り越えるモノ」

「俺達、覚悟は出来てるよ」

その答えにカイトは小さく笑う。

「そうだな…。行つてらっしゃい」

「行つて来ます」

2人はそう言うと、ゲートへと入った。

暫く歩いていると、2人の目の前に白い球体を従えた少女が立っていた。

「妖夢」

「お久しぶりです、イリス。幽々子様はお元気でしょうか？」

「ん。元気だよ」

妖夢は小さく笑うと、すぐに表情を引き締めた。

「此処に居る、と云う事は試練を受けに来たのですね」

「うん。フェンネルに合わせて」

「判りました。此方です」

先頭に立つ妖夢の後をイリスとフェリシアーノは追った。

暫くすると、一人の少年がイリスとフェリシアーノの来訪を待っていた。

「はじめまして、フェリシアーノ・ヴァルガス。僕はフェンネル・シード。靈魂の都を治め、華術師に試練を与える魂の守護神」

フェンネルはイリスに視線を向ける。

「イリス・プラトリーナ…いや、今はイリスアリア・デイジー・セルフィーアだね。久しぶり」

「初めて合ったのはフェナサイトと一緒に居たときね…。それよりも」

「試練、でしょ？」

イリスは頷く。

するとフェンネルは表情を険しくする。

「イリスアリアとフェリシアーノの試練は特殊で単独で行うモノ…。

成功する確率は極めて低い…」

「それでも…俺達はやらないとダメなんだ」

「フェリの言うとおり、私達はやる」

その言葉にフェンネルは目を綴じる。

「じゃあ、行こうよ」

フェンネルが手を振り上げた途端、イリスとフェリシアーノはそれぞれ隔離された。

フェリシアーノが居たのは漆黒の闇に閉ざされた場所。  
そして、彼の視線の先に居たのは…

イリスもフェリシアーノと同じように漆黒の闇に閉ざされた場所だ。  
彼女の視線の先には…

## 試練開始（前書き）

イリスとフェリシアーノの影の性格は好戦的だよ。

…まあ、私がイメージする大体の影の性格は何故だか好戦的。

理由？

ゲームとかの影響。分かってんかい！

## 試練開始

フェリシアーノの視線の先に居たのは、彼自身だった。

「お…俺!?!」

思わずフェリシアーノは叫ぶ。

『そう、俺は君…。君の影、って言った方が分かり易いかな?』

「俺の…影…」

呆然と、フェリシアーノは自分の影を見据える。

『けど、君は此処で終わる…。何故なら俺が君を殺すから』

「!?!」

『予言するだけの生き方しか出来ない、弱い俺なんか要らない…。ずっとそう思ってたんでしょ?』

フェリシアーノは影が言うことに理解が追いつかなかった。

だが以前、フェリシアーノはそう思った事があった。

フェイエルノートが死に、同時にロヴィーノが追放された日以来、ずっと。

『だから、俺が変わってやるよ…。フェリシアーノ』

「っ!バリア!」

フェリシアーノはすかさず攻撃をシールドで跳ね返す。

『あっはははっ!フェリシアーノ、やるね!』

「っ!こんなの…俺じゃないっ!」

フェリシアーノは杖を握り締め、影と対峙をする。

同時刻、イリスは向き合っている2人の少女を見据えていた。

片方はイリスの影、もう一人は…。

「サクラ…」

「久しぶりね、イリス」

サクラは小さく笑う。

亡くなった親友と戦う事をイリスは躊躇いを感じた。

『イリス、躊躇ってるのかな？』

影の言葉にイリスは何も言い返さなかった。

『まあいいか…。どうせイリスは此処で死ぬのだからね…』

「な…に!？」

イリスは絶句する。

『安心して…。私が変わりになってあげるから…。負の苦しみを捨てられないイリスなんか要らないから…』

そう言うとき影はイリスに切りかかる。

イリスはフランヴェルジュを抜刀し、刃を防ぐ。

「臨鈴の華」

サクラが華術を発動させる。

刃を弾くとイリスはすかさず攻撃をかわした。

『あはっ！消えなよイリス!』

「誰が…消えるか!」

怒りに震えるイリスはフランヴェルジュの柄を強く握り締めると、影とサクラと対峙をした。

## フェリシアーノの試練(前書き)

今回はフェリがメインですっ！

ちょっとした過去話もあります！

## フェリシアーノの試練

自分の影と対峙をしているフェリシアーノ。だが、圧倒的に影の方が強く、フェリシアーノは体力的に限界がきていた。

「はっ…はあっ…」

『あれ？もうバテたの？つまないなあ…』

影は空を斬るように右腕を薙ぎ払う。

同時に衝撃波がフェリシアーノを襲った。

「っ！！」

吹き飛ばされたフェリシアーノの体は床に思い切り叩きつけられる。肺が潰れるかのような衝撃に息が一瞬止まる。

「かはっ…」

『あははっ』

影は愉しそくに嗤い、フェリシアーノへと近づく。

「っ…」

『俺さ、お前の事なんて嫌いだよ。弱くて、泣き虫で、すぐ何にでも怯えるお前なんか大っ嫌い』

静かな怒りを湛えながら影は語る。

その表情は愉しそくに嗤っていたが。

フェリシアーノは反撃するが、攻撃はするりとかわされる。

『無駄な足掻きだよ。フォースレイ』

放たれた魔術はフェリシアーノを直撃した。

「っ！！」

『言っただろ？俺はお前が大嫌いだって…。だからさ、消えてよ。』

フェリシアーノ』

影はゆっくりと手を振り上げる。

「フェイ…ねえ…ちゃん…ロヴィーノ…にい…ちゃ…」

フェリシアーノは思わずフェイエルノートとロヴィーノの名を呟く

と、目を綴じる。  
その時。

フェリに手を出さないで！

フェリシアーノに手を出すな！

「!?!」

突然聞こえた声にフェリシアーノは目を開く。

そこはあの漆黒の世界ではなく、夕凧の王城の中。

視線の先に居るのは夕凧王と言い争っている栗色の髪の少女とロヴィーノ。

「フェリを殺すなんて、喻え父親だろうが許さない！絶対に！」

怒りに震えているフェイエルノートは夕凧王に向かい、叫ぶ。

「お前なんか親父じゃねえ！あいつは…フェリシアーノは絶対に守る！何があってもな！」

すると夕凧王は腰に携えた剣を鞘から無言で引き抜く。

フェイエルノートは危険を感じ、ロヴィーノを背後に追いやるとフルーレを構える。

その時。

「フェイ姉ちゃん、ロヴィーノ兄ちゃん。なにしてるの？」

「?!?!」

2人が振り返ると其処には眠い目を擦っているフェリシアーノがいた。

「っ！フェリ、来ちゃダメ！」

「来るな、フェリシアーノ！」

「えっ？」

理解が追いつかないフェリシアーノ。

姉と兄が叫んだと同時に夕凧王はフェリシアーノへ向けて魔導を放つ。

フェイエルノートとロヴィーノは素早くフェリシアーノの前に立ち、結界を張り、魔導を跳ね返す。

だが威力は凄まじく、二重に張られた結界に罅が入る。

「逃げるよ！」

フェイエルノートはロヴィーノとフェリシアーノを抱きかかえると、外に出る。

暫くして中庭に着き、彼女は双子の兄弟を中庭の椅子に座らせた。

空は青黒く染まり、満月が昇っていた。

と同時にフェリシアーノの脳裏に紅い床に倒れ込んだフェイエルノートと、シートルによって夕風から出されるロヴィーノの姿が映る。予言の力が働いたのだ。

「っ！」

「フェリ…、何か視えたの？」

「あ…その…」

言葉に詰まる。

何かを感じ取ったフェイエルノートは小さく笑う。

「フェリ。姉ちゃん、そんなに生きられないかもしれない。王に楯突いた人間の末路は死、あるのみだから。大丈夫。2人は夕風から出してあげるから…」

「姉ちゃん…」

「もし、華の国へ行けたならこのペンダントを華の皇女イリスに見せて。彼女は2人と同じ十二歳だけど、幾つもの戦場を駆け抜けた戦姫なの」

フェイエルノートはロヴィーノに金のペンダントを渡す。

「姉ちゃん…俺…」

不安にかられているフェリシアーノはフェイエルノートを見つめる。

「…シン・ナータ・ラクト・アルケ・ウィアス・ヴァル・エスト・ポース」

困ったように笑うフェイエルノートは呪文を呟く。

「それは？」

「ある人から教えてもらった呪文。『無垢なる魂よ、女神の希望を唄い、永遠なる世界に光を』って意味。覚えておいてね。何時かフェリを導いてくれるから。大丈夫。フェリは1人じゃない。ロヴィ

や、あの子達も居るから」

にこやかにフェイエルノートは優しく言う。

其処で幻は途絶え、闇の世界に戻った。

我に返ったフェリシアーノは影の攻撃を杖で防ぐ。

『しぶといね…』

「…確かに俺は…弱いし、泣き虫だし、臆病だ…」

『？』

怪訝そうに影はフェリシアーノを見据える。

「けど、大切な人達が、弱くても、泣き虫でも、臆病でも良いって

言ってくれたんだ…。それは俺が俺である証…」

フェリシアーノは瞳に強い光を灯す。

「俺は…俺は絶対に消えない！俺が俺である証を持つてる限り！」

『なっ…』

「シン・ナータ・ラクト・アルケ・ウイアス・ヴァル・エスト・ポ

ース！」

呪文を唱える声。

その時、フェリシアーノに宿る臨星の華が現れ、光を放つ。

「臨星の華！」

臨星の華は強い光を放ち、再びフェリシアーノの中へと戻る。

一つの槍を残して。

「姉ちゃん…」

フェリシアーノは目を綴じると、小さく笑う。

そして、旗の着いた槍を構えると、詠唱をする。

「咲き乱れよ、永久の光をたたえし華！その祈りを解き放て！悠久

の華！」

唱えた途端、白い花卉が影を包み込み、花卉が弾け飛ぶと影は消え

た。

「…終わった…のかな？」

小さく呟く。

すると、フェリシアーノは体が浮くような感覚を感じた。

そして、ある場所へと飛ばされた。

## イリスの試練（前書き）

今回はイリスの試練ですが、イリスにとって凄く過酷で辛い事があります。

## イリスの試練

フェリシアアーノが試練をしている時と同じ頃、イリスは攻防戦を続けていた。

一向に止まない華術と接近戦に苦戦を強いられていた。

「闇に集え、幽玄の者よ！ダーク・インフェルノ！」

イリスは闇の魔法を放つが、かわされた。

「翔遊斬！」

「黎明の華！」

影とサクラの攻撃を素早くかわすが、左足に攻撃が当たる。

「くっ！」

紅い血が流れる脚を押さえながらイリスは、次々と来る攻撃を胡蝶のようにかわしていった。

『しぶといな。でも、遅いよ』

影が刃を横に薙ぎ払うと真空波がイリスを襲った。

避けきれず、まともに攻撃を受けたイリスは宙を舞い、床に叩きつけられた。

「うっ……」

起き上がるうとした時、イリスの目の前に刃が突き付けられる。

『私ね…貴方が大嫌い。みんなを護れない私なんか、存在する価値なんてないよ…。だから…消えて、イリス』

「…みんな…フェイエルノート…ごめん…」

イリスは目を綴じる。

と、吹き抜ける風が違う事に気付いた。

ゆっくりと瞼を開けると、其処は白い花が咲き乱れる草原だった。

「ここ…は…」

「私と最期合った場所よ。イリス」

サクラの声にイリスは背後を振り返る。

「此処はイリスの私との最期の記憶が生み出した幻。現実ではない

わ

「私が生み出した…幻…」

「フェリシアーノさんも、彼の…フェイエルノートとの最期の記憶が生み出した幻を見ている筈よ」

そう言うつとサクラは草原に咲く花に触れる。

「あの時、イリス言ったわよね…。『私の事は守らなくていい』って」

「……………」

「私は、臨星の華をフェリシアーノさんへ返すという使命に従っていた…。その事はみんなに言えなかったの。無の華を宿した華術師の末路は、虚無に消え去るって知っていたから」

弱々しくはにかみながらサクラは語る。

その瞳には憂いさえ宿っていた。

イリスは何も言えなかった。

「死んだ筈の私は肉体と魂が同化し、靈魂の都へと流れ着いた。理由は判らなかった…」

イリスはいやな予感を感じ取る。

「私ね、ずっと本当の死になるために方法を探していたの…そして…」

「やめる…」

「私が本当に死ぬためには…」

「やめる…言うな…」

だがサクラは語ることを止めない。

「それは、イリスが私を殺すこと」

凜とした声がイリスを貫く。

「やめるおおおおっ！！何も言うなああああっ！！」

絶叫が響き渡る。

イリスは耳を塞ぎ、膝をつく。

サクラは悲しげにイリスを見据える。

「イリス…」

「私は…サクラを殺せない…。殺したくない…。もう…あんな思いはしたくないんだ…」

イリスは微かな声で呟く。

するとサクラは屈むと、イリスの頬に優しく触れる。

「イリス。貴方は今を生きないとダメよ。イリスは生きているんだから」

イリスはゆっくりと顔を上げる。

其処には優しく微笑むサクラがいた。

「生きて、イリス。私の分まで、ずっと」

「…サクラ」

途端に幻は弾け飛び、目前には影の持つ剣の刃が映る。

イリスは刃を弾く。

「…私は…絶対に…！」

煌めく焰のごとく紅い双眸が輝く。

「…負けない！」

叫んだ途端、イリスの脳裏に浮かんだ言葉。

「月夜に浮かびし清廉の華！我の声に答えし、暁の花弁と共にあれ

！悠暁の華！」

詠唱を終えると、真紅の花弁が影を包み込み、影と共に消え去った。

残ったのはイリスとサクラ。

するとサクラは両腕をゆっくりと広げる。

「此処、しっかり狙って」

サクラは自分の鎖骨辺りを示しながら言う。

「サクラ…」

「早く」

「…でも…私は…！」

「早く、イリス！私を殺して！」

「っ！」

震える手に力を入れ、フランヴェルジュを構える。

「うあああああっ…！」

叫びながらイリスは跳躍し、サクラとの距離を縮めると…

サクラの胸元にフランヴェルジュを突き刺した。

紅い血が紅く揺らめく焰の靈剣の刃を伝い、地に滴り落ちる。

刃を引き抜くと溢れんばかりの血が流れ、サクラは小さく微笑みながら倒れた。

「…サクラ…」

イリスは俯きながら、嘗ての仲間の名を呟く。

と、体が浮かび上がり、イリスはある場所へと飛ばされた。

生きること(前書き)

タイトル意味ふ(泣笑)

## 生きること

イリスとフェリシアアーノはあの場所、夢見の遺跡へと飛ばされた。其処にはミク、カイト、ルナサ、メルラン、リリカが2人の帰りを待っていた。

「お帰り！その武器…試練、合格したんだね！」

メルランが嬉しそうに言う。

イリスは腰のベルトホルダーに新たな剣の鞘があるのに気付いた。鞘から剣を引き抜くと、刀身は星の煌めきのごとく輝いていた。

「創星の華から生まれた剣…。何時の間に…」

小さく呟くと剣を鞘に収める。

ルナサはイリスの様子がおかしい事に気付く。

「イリス、どうしたの？顔色が良くないわよ」

「……………」

イリスは俯くと、掌を強く握り締める。

かなり強く握り締めた為、指の間から紅い血が滴り落ちた。

「サクラが靈魂の都に居たのを知ったから。肉体と魂が同化した不死の存在として」

「妖夢！？」

リリカは何時の間にか居た妖夢に驚いた。

「サクラが！？不死の存在として…」

「そのままの意味。サクラはあの日、確かに死んだけど、肉体と魂が同化して靈魂の都へと流れ着いた」

「じ、じゃあ、サクラは生きてるの？」

「ええ。死の無い苦しみを味わいながら生きていた」

「いた？何で過去形？」

疑問に感じたリリカは訊ねる。

「…私が…サクラを殺したんだ…」

「…！？」

全員は驚き、イリスを見据える。

「う…嘘でしょ？何で…」

「サクラは死ねない苦しみを解放するために、色々調べた。辿り着いたのが『不死の者にとって大切な者が不死の者を殺すこと』と言  
う答え」

「そんな…」

ミクは絶句した。

「自分は解放されると共に、相手に苦しみを与える矛盾を孕んだ方  
法…。悲しい…方法だね…」

フェリシアーノは俯きながら呟くと、微かに震えているイリスを見  
詰めた。

大切な人を手に掛ける。

かなりの覚悟が必要であり、彼の者に更なる苦しみを与える。

フェリシアーノにとっては、考えたくない事でもあり、したくない  
事であった。

俯くイリスは唇を微かに動かす。

「…サクラは私に生きろって言った…。私はサクラを殺したんだ…  
許されない事だって判ってる…。ううん…私は沢山の人を殺した…  
それでも生きていいのか…？」

重くのしかかるような言葉に辺りには沈黙が流れる。

「…いいんだよ」

ふとフェリシアーノはイリスに言う。

「フェ…リ？」

思わずイリスは彼を見据える。

彼は優しく笑っていた。

「人を殺したって言うてもイリスはイリスだよ。イリスや俺達は『  
此処』にいる…。イリスがいなかったら、俺達は今此処にはいない  
よ。だから生きて、イリス」

その言葉にイリスは呆然とする。

「フェリ…。お前たまにフェイやロヴィと同じような事言うよな」



聖星華の祭 初日 (前書き)

今回は長編です！

## 聖星華の祭 初日

街に戻ったイリス達はそれぞれ別れ、イリスとフェリシアーノは家に戻った。

家では2人の帰りを待っていたスカーレット姉妹、ルーミア、チルノ、そしてロヴィーノがいた。

戻ってきた2人を5人は囲んだ。

「おかえりー！」

2人の生還を喜んでいるフランドール、チルノ。

「おかえりなさい」

小さく笑いながら言うレミア。

「ちぎー……。心配せんよ、このやるー！」

悪態をつきながらも泣きながらフェリシアーノを抱いているロヴィーノ。

「わぁーん！イリス、無事でよかったよあー！」

泣きながらイリスに抱きつくルーミア。

「ただいま」

イリスとフェリシアーノは小さく笑いながら言う。

その夜はロヴィーノとレミア、ルーミアが作ったパスタ等の料理で、楽しく2人の試験合格を祝った。

翌日、イリス達は王城へと向かった。

この日は華の国全土の花が咲き誇る日で、国上げての祭りが行われていた。

華の国では『聖星華の祭』、他国からは『結界華の祭』と呼ばれ、何故かこの日から一週間だけ国境では結界が張られ、華の国へは入れなくなる。

その前日に聖星華の祭を見たいという他国の人々は華の国へ入国しなければならなかった。

元々華の国は治安が良く、盗賊などの輩はいないので犯罪と言う犯罪は一つも起こった事は無い。

侵入してきた夕風の兵士達が国内で魔物を召喚する事はあるが、それ以外では起こった事は無かった。

朝食を済ませたイリス達は城へと向かった。

中庭では咲く時期など関係なく、様々な花が咲き乱れ、美しい色彩を描いていた。

「ヴェー…、すごい綺麗…」

「聖星華の祭は華の国の守護神である華の女神を敬う祭だ。大昔、この国に華の女神が舞い降り、天界に還る一週間まで華の国全土で全ての花が咲き誇ったらしい」

イリスが祭の逸話を話すとフェリシアーノはキラキラした瞳で彼女を見る。

「ホントなの!？」

「いや…本当かどうか判らないけど…。でも毎年、聖星華の祭の時期になると国全土で全ての花が咲き誇るんだ」

フェリシアーノの勢いにイリスは少しひきながら言う。

と、何かを思い出した。

「って、あぁーっ! そうだった! フェリ、ロヴィ、レミィ、フラン、ルーミア、チルノ! 急いで! 特殊部隊はあの服装に着替えたんだっ!」

「………!!」「………」

「ヴェー?」

1人だけ読めてないフェリシアーノをイリスは引き摺りながら、七人は城の中に向かった。

城の更衣室で特殊部隊はとある服装になった。

白布地の軍服によく似た服に、一人一人の左胸にそれぞれ違う花を模したブローチを着け、頭には女子は羽根飾りと白百合の着いた髪飾り、男子は羽根飾りと青薔薇の着いた小さなシルクハットを被っていた。

イリスは白い質素なハーフパンツとスカートの前が開いたシフォンドレスを着、胸元には羽根飾りの着いたリボン、頭には雛菊の華飾りが付いた小さな白銀のティアラ。

フェリシアーノは白い質素なロングコートを羽織り、ハーフパンツとYシャツを着、胸元には羽根飾りの着いたリボantai、頭にはフイラの華飾りの着いたシルクハット。

全員、揃いの白いブーツを履いていた。

豪奢でもなく、質素過ぎない、純潔をイメージした服装は聖星華の祭で特殊部隊の部隊員だけが着る特別な服装だ。

女神を守る華の天使と、イリスは創星の神子、フェリシアーノは臨星の神子をイメージした服装だ。

「イリス！リボンが結べないであります！」

「はいはい。待ってて」

慣れない服装にフェリシアーノはイリスに助けを求めた。

イリスは苦笑しながらリボantaiを結び、羽根飾りを着けた。

その後、フェリシアーノは一週間同じ格好でいることを後で知ると、深くうなだれた。

そのため、かなり支度に手間取る羽目になった。

漸くフェリシアーノの支度が整うと、特殊部隊全員は王族が待つているバルコニーへ向かう。

バルコニーに着くとカシス、グラス、プラム、スイレン、エルバ、そしてフローラが居た。

彼女達はイリス達が来たのを確認すると、フローラはバルコニーの手摺に近寄る。

下には沢山の国民や他国の民が居た。

「此より、聖星華の祭を開催します！」  
フローラの透き通った声に、彼等は歓声をあげた。  
その夜、城に設けてある特殊部隊専用の宿舎でイリス達は眠りにつ  
いた。

聖星華の祭 再会と生き物 (前書き)

今回もちたりあが出て来ます。

## 聖星華の祭 再会と生き物

翌日、目覚めたイリス達は街中へと昨日の衣装のまま出掛けた。

街中を歩いていると華の国の伝統衣装を着ている人がほとんどだ。

ふと、フェリシアアノは少女達が持っている薔薇の花を象った淡い桃色の石の付いた羽根飾りに気がついた。

「イリス、あの人達が持っている羽根飾りは何？」

「ん？あれは『ローズクォーツの羽根飾り』。聖星華の祭最終日、少女達は羽根飾りを精霊の湖に沈める。ローズクォーツの羽根飾りには精霊の湖に沈むと恋が叶う、逆に浮かび上がると運が上がるって噂があるんだ」

「へえ……」

「水の精霊ウンディーネは『最終日は後片付けが大変よね』って言うくらい半端ない数の飾りが浮いている」

「……………」

イリスの話に、フェリシアアノは有り得ないという表情になった。

「毎年、私も手伝いしてるんだ。消失の華で羽根飾りの片付けはしてるんだけどさ、数が半端なかった……」

「今年、俺も手伝うよ」

「ありがとう……」

微妙な表情の2人に、後のメンバーも微妙な表情になった。

彼等もまた、精霊の湖の片付けを手伝いをしているので、苦勞が手に取るように判っているのだ。

沈んでいる羽根飾りは滅多になく、沈んだ羽根飾りは片付けしないと云う。

理由はウンディーネ曰わく「沈んでいるのは水の神様がなんとかしてくれるからほっといいよ」だそうだ。

暫く街中を歩いていると、菊は数人の人影を見つけた。

「あれは……」

菊が呟くと同時に2人が此方に気付いたらしく、振り返った。

「あれ？イリス達じゃん。お久しぶりのな」

「菊さん！イリス！」

2人は此方に駆け寄って来る。

イリスと菊に声をかけたのは、まだ幼さが残る少年と少女だった。

「香と湾って事は…」

「王さん達も居るって事ですか？」

菊は香と湾に訊ねる。

「まあ、そうっすね。あと、他の国の人も3人くらいいる的な」

「すっごくcawaiiですヨ！」

「ちよつとパネエっす」

2人の言葉にイリス達は再び微妙な表情になる。

「香、湾…、もちつと分かり易い言葉で喋って…」

と、その時。

「菊ううううう！！」

誰かがもの凄いスピードで菊に駆け寄ろうとする。

「イリス、結界を！」

「へっ？あ！うん！簡易…、展開！」

菊の言うとおりに結界を張ると、同時に見えない壁に黒髪の青年がぶつかる。

「へぶっ！？」

「王さん！今、私達は衣装を着ているんです！飛びつくのは止めてください！」

菊は借りてる衣装が汚れるのを防ごうとしていた。

「耀…。弟との再会の気持ちは判るけど…止めるよな」

「そ…：そうあるな…」

王は赤くなつた額を押さえながらにつこりと笑う。

「菊、イリス姫。元気そうで何よりある。ん？」

ふと、王はイリスの後ろに居たフェリシアーノを見据える。

「そっちのロヴィーノによく似た青年は、言霊の神子あるか」

「ええっ！何で、判ったの!？」

フェリシアーノは驚いたように王を見る。

「まだ名乗ってなかったあるな。我は王耀。これでも仙人ある。予言者なら簡単に見抜けるあるよ」

「自称っすけどね」

「そっだヨ」

王の説明に香と湾はツツコミを入れる。

「香、湾、ちよつと説教聴いてくよろし」

その言葉に青筋を立てた王は2人に言う。

「エスケープ的な」

「逃げるネ！菊さん、イリス、またネ！」

「まつある！」

脱兎のごとく逃げた香と湾を王は追いかけた。

「あの3人、ぜんっぜん変わってないな」

シンは苦笑を浮かべながら呟く。

菊はと言うと真っ赤になりながらフェリシアーノに謝っていた。

幾らか街中を歩いていると、花の香に混じり甘い香が流れてきた。

「この匂い…花実餅か」

鼻を利かせるイリスは呟く。

「花実餅？」

フェリシアーノはイリスに訊ねる。

「菓子だよ。花卉とその花の果実を練り込んだ餅がこの時期に作られる。焼くと甘い香がするんだ。練り込む花卉と果実で味と匂いは異なるけど、甘い風味なのは共通だな」

「じゃあ、この匂いは何の花実餅？」

「これは…フィラだな。食うか？」

そう訊ねると、フェリシアーノは明るい顔で頷く。

イリスは匂いの元を辿り、花実餅を売ってる場所を探す。

見つけると花実餅を2つ買い、急いで戻ると、フェリシアーノに1つ渡し、花実餅を食べた。

フェリシアーノは幸せそうな顔で餅を食べる。

イリスも餅を食しようとしたが、餅が小さく動いているのに気がついた。

よく見ると、餅に顔とフェリシアーノとロヴィーノのようなくせっ毛がついていた。

「ええええええっつっ!!?!?」

「イリス、どうし…!?!?」

フェリシアーノはイリスの手の中にいる生き物に驚く。

「へー、フェリシアーノにソックリだな」

デュオは餅をまじまじと見ながら呟く。

「可愛いですね」

「菊、問題其処じゃないぞ」

餅を見て頬を赤くしている菊にレンはつつこむ。

「わあ…ちよつと触らして!」

ランカは撫でようと手を伸ばすが、ほのぼの顔のフェリシアーノによく似た餅はイリスの肩にぴよんと乗る。

「わっ」

驚いたイリスは餅を肩越しに見据える。

「うー…、イリス羨ましいなあ…」

「其処、問題じゃねえぞ」

アルトはつつこむ。

その後バチュリーの協力を得て、餅がスライム系の魔物ではなかったが、結局餅が何かは判らなかった。

餅はイリスに懐いているので、結果的にイリスが餅の世話をする羽目になった。

聖星華の祭 再会と生き物 (後書き)

イリス「作者、なんで私が？」

作者「ん？もちたりあの件？イリスに懐いていたから」

イリス「それだけ？…まあ、食費があまりかからないから良いけど…」

作者「じゃ、いいじゃん。あ、感想等お願いしますっ！」

イリス「話を逸らすなああああ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2908t/>

---

華と夕凧の魔法

2011年10月28日08時14分発行